Bulletin of the Faculty of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1987, Vol. 34, 189-217.

桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(2)

小　嶋　秀　夫

幕末の9年間にわたって，渡部平太夫・勝之助（1839－1848）によって書かれた桑柏日記（桑名日記・柏崎日記）は，一組の家族交換日記である。筆者の前論文（小嶋，1986）は，日記の前半部分を対象として，その中に現れた子どもの発達と，それと相互規定的にかかわり合う家族生活とを発達心理学の視点から分析したものである。[1] 本論文では，それに引き続いて後半部分の分析を進めるとともに，かれらの生活の背景をなす社会的・文化的環境をも分析の対象とする。この日記を取り上げて分析する意義と目的，日記の成立過程，分析の対象領域と分析方法に関しては，すでに前論文で述べてある。

本論文の「分析の結果」の部分は，以下の4つのセクションに分けて述べることにする。すなわち，

1．桑名での鐐之助の生活とその環境：1844－48年，
2．柏崎での4人の子どもの生活とその環境：1844－48年，
3．子どもの発達とその生育環境：1844－48年，
4．社会的・文化的環境：1839－48年である。

なお，3のセクションでは，前論文で取り上げた17の項目に，子どもの成長とともに出現するようになったもの1項目（役割参加）を加えて記述する。また，桑柏日記には，勝之助・おきく夫婦の間に生まれた上の5人の子どもに直接関連する事項の他にも，子どもの発達とその取り扱いに関する記述がかなり多く含まれている。それらのうちで，この論文の目的に関連深いものは，随時取り上げて行く。

そして，最後に全体的な考察を行った上にエピローグを添えて，論文を締めくくることとする。

分析の結果[2]

1．桑名での鐐之助の生活とその環境：1844－48年

前論文でも述べたように，7歳頃から鐐之助の行動と周囲のものによる取り扱いに，1つの移行が認められる。それには多くの要因が絡み合っているであろうが，中心をなす過程は次のようなものと考えられる。すなわち，それまで専ら家族と親戚のネットワークからなる生活圏の中で暮らしていた鐐之助の社会的世界が拡大し，それと平行してかれの行動能力が発達してくることによって，鐐之助の家庭内での言動に変化が出てくる。そのような環境と行動面での変化は，6歳を超えた頃から徐々に進んでいたのであるが，7歳を過ぎて近所の仲間が通うのと同じ師匠のもとへ手習いと書物の学習のために通い始めて暫くした頃から，鐐之助の行動変化が目立つようになってきた。かれは不従順となり「あくれつき」，おばばや平太夫との間で摩擦が生じた。ふたりが鐐之助の行動を以前のように統制することは，困難になってくるのである。

平太夫とおばばに禁止されたことでも，鐐之助は自分がしたいことなら他の親戚などを活用して隠れてでもやり通す。逆に，平太夫とおばばが命じたことがらでも素直にはしない。そうすると祖父母と孫との間に葛藤が生じる。そのとき，鐐之助が達者になった言語能力を使って憎まれ口をたたくので，おばばや平太夫が怒ることになる。祖父母や叔母に対しては，鐐之助は以前から憎まれ口をよくきいていた。しかし，自分に愛着し，心理的な統制法によって孫の行動をコントロールできていた頃には祖父母が許容できた憎まれ口が，今度はもう許容できなくなる。

そこでかれらは，体罰も使うようになる（3の項目17

1）前論文の表1の中の行三郎の誕生日（3月6日［グレゴリオ暦］）は，3月5日と訂正する。

2）前論文と同様に，日記への言及は＜　＞で囲んだ日記名と日付により行う。略号は桑（桑名日記），柏（柏崎日記）；天（天保），弘（弘化），嘉（嘉永）を用いる。また，子どもの年齢の計算はグレゴリオ暦により行い，［年：月］あるいは［00週］で表示するが，ともに日を切り捨てた「満」の年・月齢または週齢である。なお，登場人物の年齢が示されているときは，とくに断っていない限り，満年齢である。

を参照)。従来の「いって聞かせる」やり方の効果が弱まったことに加えて，鐐之助の反応によって引き起こされた怒りが，体罰へと導いたのであろう。それはとくにおばばがよく行い，平太夫はその尻馬に乗ったという感じさえ受けるのである。しかしそれはあまり効果がなく，かれらが鐐之助を持て余し気味にすることがおよそ2年近く続く。ただし，それにもかかわらず，鐐之助は平太夫に愛着を示し続け，平太夫たちも鐐之助を基本的に受容している。そして，双方が行動を調整することを通して，祖父母と鐐之助の関係は再び穏やかなものに戻って行き，両者の間の心理的距離も縮まって行った。

ところで，鐐之助は一緒に住んでいる祖父母とおなかとの間では行動統制にかかわる葛藤を経験したのに対して，親戚のおとなや家に出入りする若手との関係は円滑である。また，近隣のおとなとの間で問題が起こることも稀であった。これらのおとなたちは，罰せられた鐐之助を祖父母に取りなすとともに，鐐之助に多様な経験を与えてくれる存在であった。また，ほぼ同年配の仲間との生活もますますその重要性を増して行った。これらの仲間が通っているからという理由で，鐐之助は特定の師匠のところへ通いたがり，またかれらもしているからという理由で網すきの仕事をやりたがった。このように鐐之助は，広い範囲にわたる多様な人々と関係をもちながら，毎日の生活を送っていたのである。

鐐之助の生活は，依然として遊びと趣味の活動を中心としたものであった。8歳近くになってからのかれは，ときには家庭の補助的な役割を果たすことも出てきたが，それは家庭を運営して行く上で欠かせない重要な役割ではなかった。この点に関して鐐之助が家族や地域社会から特別に期待されることはなかったのである。また，7歳過ぎからは伯父の手から離れて師匠につき，手習いと書物の学習の時間は増加して行く。しかし，遊びと趣味の活動になお興味が傾いているので，復習を十分にしない。とくに書物の学習には身を入れていないので，その進歩もはかばかしくない。平太夫も言葉での働きかけはするが，鐐之助を学習へと動機づけることには成功しなかった。

桑名の渡部家に起こった別の大きな変化は，おなかの結婚とそれに引き続く離婚と出産であった。平太夫たちは以前から末娘のおなかを結婚させようとしていたが，実際の結婚が行われたのは弘化3年2月で，おなかは満で17歳くらいではなかったかと推定される。しかしその後暫くして先方から離縁の話が起こり，結婚後6か月ほどで離縁となった。それには，鐐之助の伯父であり，かれのメンター（mentor）役の佐藤留五郎が絡んでいたようである（3の項目14を参照)。それは複雑に親戚関係が入り組んでいる中での出来事であるので，波及的な効果も起こり得たのであるが，留五郎が渡部家に出入りしなくなったほかには，おきくの実家の佐藤家と渡部家の関係には大きな変化はなかったようである。また，おなか自身が離縁になったことを苦にした様子も窺えない。さて実家に戻ったおなかは女児を生み（結婚9か月半後)，おすみと名付けられたその子とともに居候になる。平太夫夫婦は自然に2人を受け入れているし，おなかにも早く再婚しようという気持ちはなかったようである。

日記の期間中，平太夫はずっと現役として勤めていた。弘化3年に破損奉行格に列せられたが，実際にはずっと御蔵勤務であった。計数に明るく，職務上で米商人や仲仕とも接触があり，米の前借を頼みに自宅に押しかけてくる藩士に悩まされながらも，手際よく仕事をさばいていた。痔疾を病み，ときどき風邪などで調子が悪くなることもあったが，かれは概して健康であった。しかし在勤53年半にもなろうかという嘉永元年2月半ばから，平太夫はそれまでにない種類の身体の不調を覚えている。すなわち，喉がいがらっぽく，痰も引っかかっており，頭痛がして気分がひどく悪い。そのうちに声がでなくなってしまった。それでもかれは，鐐之助を連れて草摘みに行ったり，出勤したりしている。その上，それ以前からおなかがひどい下痢を患っており，医者たちもかんたんには回復しないだろうと悲観的な見通しを述べていた。まだ1歳2か月のおすみの世話もあって，そのときの渡部家はかなり混乱していたものと思われる。

平太夫の日記は3月4日で終わり，その3日後にかれは死んだ。その死亡原因と少し前からの喉の異常とが何か関係するのか筆者には分からない。かれの日記は，「(若手がたてた風呂に）鐐之助も昼より行き候よし。」で終わっている。鐐之助は最大の支えを失ったのである。

2．柏崎での4人の子どもの生活とその環境：1844－48年

勝之助一家にとって，真吾の長期間の大病と発育の遅れに，おきくの不調，そして一家のシステムの大混乱という試練を経た天保14年が終わった。翌天保15年（1844）の出発は穏やかであった。真吾の発育過程だけではなく，勝之助一家の対人関係や生活経済のシステムも，徐々にバランスを回復する時期に入っていたからである。1月20日［グレゴリオ暦：3月8日］は穏かな上天気で，勤務から帰った勝之助は午後からおろく，真吾，それにお向かいのお民をつれて近辺にぶらぶら出かけた。そして大窪（大久保）村を通りかかったときに1年前を振り返って述懐している：「去年この節，真吾毎日吸いふくべかけられ，誠に可愛そふでならず。蛭を手に入れたく，この辺をた

びたび歩きしに，当春は大丈夫になり，生まれて初めて抱いてこの辺まで参る也。」<柏，天15．1.20>。真吾の目尻から吸いふくべで血を取るのは医者も可哀いそうがるほどであったので，蛭に吸わせようとして，人に頼んだり自分でもいそうな所を掘ってみた。しかし，1月［旧暦］ではやはり無理だったのである。それから1年ほどたったその日には，真吾［1：9］は3，4歩ずつ歩けるようになり，それが面白くて，何か手にもってそろりそろりと家の中を歩いたのである。

おきくの健康も回復してきて，その年の盆には勝之助は再び述懐している：「一昨年，昨年も盆におきく寝ており，当盆ばかり病人なしと存じ候ところ，おろく風邪ひき。されども是ももはや格別の事でなし。内はひいひいがらがらなれども，おきく大丈夫になり候て大安心也。」<柏，天15．7.12>。おきくは前年の10月から生理も3か月続き，その後，生理の滞りか流産か医師にも分からぬ出来事が1回あったが<柏，天15．3．2>，その後は徐々に正常になって行ったのであろう。

やはり，家族成員の健康状態が家族システムに及ぼす影響は大きいのである。例えば，子どもが病気になると母親の手がそれに取られて家事がおろそかになり，また他の子どもの相手にまで手が回らなくなる。そして父親が家事や子どもの世話に手を取られるので，勤務にも差し支えが出かねない。逆に，母親が病気になっても，子どもと父親の現実的・心理的生活に大きな影響が出てくる。日頃から，ぎりぎりの人手で家庭運営をしている場合には，それらの影響がクッションなしでまともに出るので，家族外からの支援なしに危機を乗り越えることは困難である。平太夫と違って，勝之助には宿直の他に，稲の不作や田の被害の検見のために同僚と手分けして何日間かずつ領内に出張をする必要があり，勝之助が職務を全うするためにも，外からの支援体制が必要であった。それに勝之助一家の場合には，下の子の病気と母親の不健康とがあい伴って起こったので，困難はいっそう大きかったのである。しかし，漸くこの時期になって，家族の諸機能が安定度を回復してきたのである。おきくにもときどき賃仕事が入るようになった。

真吾もおろくとよく遊べるようになって，天保15年の夏頃からは子守がいなくてもよくなった。そこで，真吾との結びつきは強いが，お弓に辞めてもらうことにした。ただし，お弓がよそに勤めずに家にいるのなら，人手が要るときにはきてもらうつもりにしていた。事実，客の接待や出産・病気，あるいは家の行事のときなどには，下働きの人手が必要になったのである。

実際，勝之助一家が家族外からの支援に依存していたことは，勝之助自身が日記の中で正直に告白している。陣屋の宿舎替えがあり，お向かいの竹内は勝之助の家から遠い場所（といっても，同じ陣屋の中であるが）に移されるという噂であったが，勝之助の西隣に決まった。そこは条件の悪い長屋で，叔母さの落胆は大きかった。しかし勝之助一家にとっては，それは気の毒であるとともに「大歓びの事」でもあった：「……何事も御向ばかり一さい力に致し居り候もの，何と致したものかとおきく大案じの所，隣家にあいなり是迄よりも又近くなる。内実は大歓びなり。……かつ番留守や郷出の時，とても子どもの相手，何事と申しても御向ばかりを力に致し居る事也。」<柏，天15．4.13>。

勝之助は竹内家の相談（運八郎の縁談・離婚，その弟の悠之助の身の振り方など）や書類・手紙の代筆などで，竹内の役にたってはいる。しかし，実際面での援助で考えると，両家の援助関係はバランスが取れていない。人手の供給だけで考えても，竹内家をおきくが手伝う分はおそらく竹内家の人々による援助の1％にも満たなかったのではないだろうか。おきくの実家の佐藤家と竹内家とは縁続きであるらしいが，そのような関係よりも，竹内家の人々が渡部家の子ども，とくにいちばん下の子を深く可愛がり，子どもたちもよく懐いたという関係性（項目14を参照）が，上記のアン・バランスを相殺する方向に働いたものと考えられる。

勝之助一家にとっておろくの成長は都合のよいものであった。真吾は姉とよく遊ぶようになり，また，大柄であった彼女は，5歳台の終わりから真吾をおぶえるようになった。おろくが真吾を必要によっておぶったり，また歩かしたりして，かなりの遠方まで移動できるようになったことは，おきくの手があくことを意味している。そして，6歳半近くにもなると，おろくは家庭の運営に実際に寄与できる程度にまでなっていた（項目18を参照）。第4子おりんが生まれたのはちょうどそのときであった。

弘化2年9月5日（1845年10月5日；ただし実際の出産は，翌日の午前1時過ぎ）に女児（おりん）が誕生した。今回は出産の経過も比較的うまく進み，また産後の肥立ちや乳の出もよかった。おろくだけでなく，真吾が大喜びで兄だと自覚し，おりんをたいへん可愛がった（項目15を参照）。歓迎された誕生といえよう。勝之助は臨時の手伝いを雇い，また竹内を初めとした陣屋の人々からの援助も得られたので，すべては順調に進んだ。「おきく日にまし達者になり，乳も沢山。小女（おりん）おとなしく大仕合わせ也。」，「おきく誠に達者にて，相応に手伝い致し候へども，なるだけ要心にて余りはたらかぬ様に致させ候。小女も真吾もおとなしくて都合よろし。」<柏，弘 2．9.15；9.19>と勝之助は記している。

その年は凶作であった。奥州がとくに凶作で，柏崎にも米買い人が多く押しかけ，米の値段が上がった<柏，弘 2．9．9>。澤下（1987）が桑柏日記から作成した表によっても，桑名の米相場も柏崎でのお払い米の入札価格も上がっている。柏崎陣屋でも藩士が手分けして領内の検見に出かける必要が生じた。勝之助も9月20日から2回に分けて，延べ18日間も出張している。しかし，周囲の人々の援助もあり，またおきくとおりんの状態もよかったので，問題はなかった。検見の途中で勝之助が一旦帰陣したときには，おきくも床を片付け元気で働いていたし，おりんも申し分のない状態で勝之助は大安堵したのであった<柏，弘 2．9.27>。

その後もおりんの成長は順調に見えた。いさ（項目5を参照）に入れられていたが午後遅くなるとそれがいやになるようで，生後5週のときにはもはやいさに入っていることが似つかわしくないほど大太りになっていた。大朝寝が大好きなおろくも，おりんをおぶってくれと頼まれると，むっくりと起き上がり肌に負うのであった。

11月4日におりんはおきく・おろくと初めて洗場に行った。そして6日の日記に，近頃子どもの咳が大流行で，夜に一寝入りすると子ども3人が咳き始め，痰を吐き大変苦しそうだ。大人2人も咳が出るが風邪引きのようではなく，奇妙だという記述が急に出てくる。おりんはその夜とくに咳が強く，乳をいっこうに呑まない。おきくはろくに寝ずに介抱した。それからの10日余りの間は，渡部家はいろいろと多忙であった。おきくが町の今井屋という心易い家に招かれて，柏崎へきて初めての気晴らしをしたり，珍しいことに勝之助が小工事の請負業者から接待を受けたりする。また，おりんの七夜の祝いと，おろく・真吾の祝い（項目1を参照）があい次いで行われた。

その間，子どもたちの咳はいっこうに止まらない。しかし，おろくと真吾は元気である。それに対して，おりんは徐々に弱って行く。乳を呑むことがあっても戻してしまい，痩せて行く。もともと「虫気」などなくおとなしく育てやすい赤ん坊であるが，なんといっても生命力が弱く元気がない。おきくがそれをたいへん可哀いそうがり，いろいろとまじない薬を使うが少しも効果がなく，おりんは元気をなくして行く。この頃からだんだんと雪が積もり始めていた。

11月19日の朝には積雪は5尺ばかりにもなり，夕方，真吾は小使いが運ぶ夜具の上に負われて宿直の勝之助のもとに泊まりにきた。あくる朝，夜具とともに真吾が帰った後で勝之助は8時前にいったん帰宅する。昨夜はおりんの咳がとくにひどく，ときには息を止めているようなので，おきくはろくに眠らなかったとのことであった。しかし，おりんは格別に弱ったようすもなく，すこし笑ったり，乳もだいぶ呑んですやすや眠るので，勝之助は出勤した。

11時頃におろくが役所にきて，「ちょっと来てくんなへ」というので勝之助が帰宅すると，「小女が死にました」とおきくが泣き声でいう。勝之助の出勤後，おりんはおろくに背負わせておいた。おしめなどを洗ったおきくが，寝てはいるが調子がよくないようなのでおりんをおろして見ると，口に痰を含み唇は真っ白になっているので，大仰天しておろくに勝之助を呼びにやらせたのである……。「全体生まれ立ちよわく候か，大声出して泣く事なし。……十日の余も咳出，乳もろくにたべず。次第よわりの所へ痰せき上がり其ままになり候事と存じられ候。不足もなき子どもなれども，只むごつけなく残念に存じ候。」と，その日の日記に勝之助は記している。

桑名へ帰ることを期待して，仏壇ももたず菩提寺も決めていない渡部家であったので，竹内の墓におりんは葬られた。葬儀は深い雪の中で行われ難渋した（当国で雪中で死ぬと支出が倍かかり，たいへんなことだと勝之助は記している）。家族全体が淋しがったが，なかでもおきくの嘆きは深かった。こうして弘化2年は暮れて行くが，いったん「兄」という自己規定ができた真吾は，妹を失ってから再び自分を「ネンネ」と規定することが見られ（項目2，13を参照），それは家族成員間の関係にも影響したのである。

翌弘化3年も概して平穏であった。おろくはますます有用な存在となり，また，ほんの少しであるが手習いも始めた。真吾は七夕の仲間に入れてもらい，「子ども」の集団に入って行く第一歩を踏み出した。家計は相変わらず苦しかったが，勝之助の生活態度に，以前よりはいくらかのゆとりが感じられる。柏崎から桑名に戻ってきた人（大倉）に平太夫が勝之助の暮らしを尋ねたことがある<桑，弘 3．5.23>。それによると勝之助一家がとくに難渋しているようにも思われないということで，平太夫は合点が行かなかった。勝之助より後に柏崎へ転勤となった品川は，桑名ではさんざん不義理をして行ったくらいでしかも大家族なのに，今では暮らし向きもよいようなのでよく理解できなかったのである。たしかに，余得が多いとされる預領の掛でなく，しかも廉直な勝之助の経済は楽ではなかったであろう。また，前論文でも述べたように，おきくの賃仕事での稼ぎが少ないことも響いている。それに，家財・衣類などの財産の蓄積が乏しいことは，そのようなストックの豊かな人との比較の結果，窮乏感を高めるであろう。例えば，おきくがよく羨んだ竹内家（渡部家より禄が低い）の道具類や衣類は，少なくとも在柏40年にはなると思われる期間での蓄積も

関係していたと思われる。

しかしそれにしても，桑名の渡部家，柏崎の同僚，そして家族に対する勝之助の宣伝は，少し行き過ぎていたのかも知れない。事実，弘化3年の暮れに，品川が心配して勝之助を訪ねてきて，苦しかったらなんとか都合をつけるがと申し出たほどである<柏，弘 3.12.28>。そして，以前からおきくは掛け取りに対する応対がうまくなっていた。ところでこの年の12月にはおきくが次の出産を迎えることになっていた。しかし計算違いでもしたのか，それは次の年にずれこんだのである。

おきくが第5子を出産したのは弘化4年1月19日であった。行三郎と名づけられたその子の発育自体には問題がなかった。しかし出産から産後の肥立ち，そして乳の出方すべての経過が悪かった。出産直後だけではなく，後にもおきくは死の危険にさらされ，勝之助も少し後に，「いったんはとても助かり申すまじく，自分は是非もなし，子どもいかに致すべきと心配の所……」と書いたほどであった<柏，弘 4. 3.21>。おきくの医療と並んで最大の課題は行三郎の哺乳であったが，それは貰い乳と人工栄養（摺り粉）で切り抜け，行三郎の発育に問題が生じなかったのは幸いであった。しかし勝之助に対する家事の負担は重かった。おきくの病気が快方に向かい，本復の見通しが出てきたのは，出産後半年ほどしてからのことであった。これらの問題については，項目2と6で扱われている。

この年の3月24日に善光寺地震が始まった。柏崎の被害はなかったが，領内の被害の検見に勝之助も出張した。そして，桑名藩が松代（真田家）に見舞いの米を贈ることになったとき，勝之助がとくに指名されてそのルート上にある諸藩，宿場，そして松代藩の担当者と予備交渉をすることになった。かれはその有能性を発揮し，その任務を見事に果たした。勝之助のその期間中の日記には，地震の被害に関する記録だけではなく，役人の官僚主義や幾人もの問屋と巧みに渡り合った経過が記されている。かれ自身身分の高くない役人でありながら，目標を達成するために藩からさし向けられたものとして，独立した責任ある行動を一貫して取ったのである。かれの努力のせいもあって，米の輸送は円滑に行われ，以前に松代へ凶作の見舞いに米を輸送したときよりも，少ない経費しか要しなかったのである。なおこの年の2月に，勝之助は1石1人扶持の足米・足扶持をもらうようになり，前論文で述べたような実質9石3人扶持を受けられるようになったのである。

このように，おきく・勝之助が望んだ桑名への帰任はいっこうに実現しなかったが，勝之助一家の状況は安定性を増して行った。おろくは家事の一部をまかされてもやれるほどになっていた。弘化5年に入ってからは，真吾も学習を始めたし，真吾も行三郎も社交的でかつ穏やかな性格で，人々に好かれた。平太夫が鐐之助に学習させるためにつくった「春に父親が迎えにくる」という話は，路銀の都合もあって実現しそうになかったが，鐐之助は，「越後は今もって地震がゆるだろふか。おとっさはいつ迎ひに来なるだろふ。来なったら何と言ってよかろふ。」などと心配することがあった<桑，弘 5. 1.20>。誰もが全然予期しなかったような原因で，間もなくかれが父親に会うことになろうとは，2つの土地の渡部家の人々はまだ知るよしもなかったのである。

3．子どもの発達と生育環境：1844－48年

このセクションでは，前論文に引き続いて2つの土地における勝之助・おきく夫婦の5人の子ども（鐐之助，おろく，真吾，おりん，行三郎）の発達の姿と生育環境の特徴を，18の項目に分けて要約的に述べる。今回につけ加えることにした項目18の役割参加は日記の後半になって目立つようになってきたもので，子守，家事の手伝い，内職，親の名代としての行事への参加などを含む。前論文でもそうであったように，項目の見出しのいかんにかかわらず，程度の差はあっても，それらは子どもの発達とその環境要因の両方にかかわるものである。

1）生育に関する儀礼・慣習

この期間中に渡部家であった出生は，柏崎でのおりんに行三郎と，桑名でのおすみ（おなかの子ども）であるが，前2者の場合を中心に述べることにする。

帯祝いについては勝之助は何も書いていないが，平太夫の方はときどき記録しており，おなかの場合にも，離婚直後であるが取揚げ婆をよんで戌亥の日を選んで腹帯をしめさせ，赤飯と煮しめで祝っている<桑，弘 3. 9. 5>。ただし，それは出産の2か月半前のことであった。

ところで，貧しい家ですでに何人もの子どもがいるときには，妊娠・出産は歓迎されることではなかった。実際，おきくも真吾が1歳11か月のときに，また妊娠したのではないかと心配したことがある<柏，天15. 3. 2>。また，勝之助も豊かでなく子沢山の家で新生児が死んだときに，自分の気持ちを投影（project）させたと思われる記述をときどきしているのである。例えば同僚の家に赤ん坊が生まれたが，まことに指を並べたように6人の子どもがいる。しかもその中には，数えの4歳になっても片手・片足が利かず，まだ歩けないものも含まれている。その家ではさぞかし困っているであろうと勝之助は推察する。そしてその新生児が医療の甲斐もなく6日後に死んだ日の日記には次のように記されている：「……品川にては実はもっけの幸い，おとみ（妻）の大仕合せ

にあいなり申し候。」<柏，弘 3．3.17>。後には渡部家とは経済状態にかなりの差ができる品川家も，このときの勝之助の判断では，苦しい生活だとされたのである。

平太夫も，藩士の家で85，6歳の老女が死んだときには，「実はおめでたき位なり」と書いたこともある<桑，弘 4.11.10>。また生活苦が原因かどうかは不明であるが捨て子もあり，不慣れな藩の役人が大騒動したことが書かれている<桑，弘 5．1.23>。

乳付けをいつ行うかは，赤ん坊の状態によっても変わったようである。例えばおりんの場合には，実質的に生後1日半と少しで，五香もよく呑み胎便も出切ったと判断されたので，乳付けをしてもらい，生後40時間過ぎには，少し出始めた母乳を与えている。それに対して，行三郎の場合は五香をよく呑み，生後六十数時間たってそれを呑まなくなった時点で乳付けをしてもらっている。そしておすみの場合にはあまりよく泣くので，丸1日もたたないうちに伯母に当たるものから授乳されているのである。

出産の祝いによく到来したのは「ひも切れ」（付紐切とも記されている）であった。これは桑名でも柏崎でも行われ，それを着物の袖口につけたという記述もあるが<柏，天13．9.24>，それがどのようなものであるのか，筆者にはよく分からない。「三つ目」や「七夜」はたいてい型通り過ごされる。七夜になされる命名で興味深いのは行三郎の場合である。勝之助が赤ん坊の月代を剃った後で，予め選んでおいた3つの名前をくじにして，それを真吾に引かせて名前を決めたのである。なお行三郎の場合，おきくの産後の肥立ちがとくに悪かったこともあって，本格的な七夜の宴がもたれたのは，おきくが本復し行三郎がもう生後7か月になろうとする頃であった。

真吾が数えの3歳となった弘化元年の11月15日は，おきくが春頃から願っていた髪置きの祝いの日であった。しかし着物も調達でき兼ねるような経済状態であるので，勝之助はおきくをなだめ，ただ家で赤飯をたいてお神酒を上げるだけにとどめておいた。「初幟さへ致さぬもの，髪置きなど致さずともよろしきと，おきくなだめおき申し候。上下着の節は，桑名へ参りにぎにぎしく致したしと祈りおり申し候。」しかし，勝之助が予め注文して作らせていた真吾の脇差し（価格は約1分）に，真吾は大喜びした<柏，弘 1.12.20>。また，翌年の節句のとき，あまりに他家の幟を羨ましがる真吾のために，勝之助は紙で小さい幟をつくってやる。真吾は大喜びでそれを庭に立てたのである<柏，弘 2．5．5>。その年の11月15日には，おろくの紐解きに前年の真吾の髪置きも合わせて祝っている。おりんの七夜の祝いはその4日前に別に祝われていた。

真吾5歳の上下着には，桑名から上下が届けられ，江戸に注文（柏崎よりも安値でできた）しておいた大小も揃い，神社に参拝し家で子ども客とおとなの客の2部に分けて宴を催したときの真吾の姿を，桑名の祖父母に見せたいものだとおきくはつくづくながめたのであった<柏，弘 3.11.15>。

2）哺乳・離乳・食物

おりんを出産したときには，おきくの「たらつき」（血暈，前論文p.9参照）も軽く，産後の肥立ちも乳の出もよかったので哺乳に関する問題はなかった。それに対して，行三郎の場合には「たらつき」の症状がひどく<柏，弘 4．1.19>，1年後の行三郎の誕生日に勝之助が「おきく命拾ひ日」と書いたほど，生命の危険にさらされたのであった。そのためもあってか産後の肥立ちも思わしくなく，最初から乳不足に悩まされた。乳付けの夜から行三郎は乳を求めてやかましく泣く。貰い乳もするが，すぐに摺り粉を用いる必要性がはっきりしてきた。昼間は，何人もの知り合いの女性から授乳してもらえるかも知れない。しかし，夜に子どもに授乳中の女性に泊まってもらうことは困難である。実際，以前に子守としてきていたお弓の母親に数えで2歳になったばかりの女児を連れて泊ってもらったが，その子が行三郎に乳を呑ませまいとだだを起こして皆よく眠れず，「子持ちの泊まりこりごり致し候」<柏，弘 4．1.24>というわけでやめてしまったのである。

それからは，貰い乳・母乳・摺り粉の組み合わせで食欲旺盛な行三郎の要求に応じて行くこととなる。貰い乳に関しては，初期には何人かの女性のプールの中から事情の許す人が家にきて授乳してくれたが，後にはおろくが行三郎をおぶって先方の家へ行く場合もあった。一方おきくの乳の量はなかなか増えず，乳をだす粉薬を2人の医者からもらったり，おきくに頼まれた勝之助が鉢崎の近くの胞姫明神（柿崎町）へ願をかけに行ったこともあった。そしておきくの乳が増したのは行三郎が3か月を越してからであった。桑名では，近いところなら，乳沢山のおなかのを行三郎に呑ませたいものだといっていた<桑，弘 4.12.11>。

その期間中も，そしてその後も行三郎が1歳を過ぎるまで与えられたのが摺り粉である。それは寒ざらしの繻米の粉に砂糖を加えて煮た重湯状のものと考えられ，初めのうちは専ら勝之助がつくった。寒い夜などは茶わんに入れた摺り粉を鉄瓶で湯せんしておいて呑ませるのである。夏には逆に保存がたいへんであった。行三郎は一時摺り粉をいやがる時期もあったが概してよく呑み，少なくとも若干のエネルギーの補給と空腹感を療やすためには役立ったのである。9か月のときの行三郎は，一時，

母乳はほんの慰み程度となり，おじやも好まず，昼夜茶漬け茶わんで4はいずつ，一日で6，7合もの摺り粉を呑むようになり，「……当1ケ年は摺り粉飲まさせずはあいなるまじく，砂糖の銭もつづき申さず候。困り入り候」<柏，弘 4.11. 7>と勝之助は記している。なお，おなかの場合に増の乳が出なくて1年4か月にわたり摺り粉を呑ませ，1か月に太白糖1斤ずつ要ったこと，塩を少し加えればなお喜ぶだろうとの平太夫の思いつきの失敗などが追憶されている<桑，弘 4.12.11>。

ところで，この摺り粉はどのようにして呑ませたのであろうか。上記のような段階では普通の，あるいは呑み口の部分が少し張りだした茶わんを用いたのかも知れない。また5か月のときには，乳筒と一般に呼ばれる哺乳器を使ったことが記されている。それは竹筒に横から細い管を差しこんだもので，そこから吸うのであるが，吸い口に布で乳首様のものをつけたかどうかは明らかでない。その頃にはぼつぼつ離乳も始めているのであるが，行三郎は1回におとなの茶漬け茶わんで1杯ほどの摺り粉を呑んでいた。夏であるので味がすぐ変わるので面倒であり，行三郎の摺り粉好きには勝之助たちも困っていた。しかしその頃はおきくの乳も細っていたので，上記の「摺り粉の道具」を見せると，行三郎が狂乱して早く食べようとする<柏，弘 3. 6.25； 7.19>のも無理なかったであろう。さて行三郎の場合，摺り粉は生後7日目から与えられている。初期の頃にはどのようにして摺り粉を与えたのかは五香の場合と同じく記録されていない。もしかすると，晒木綿で乳首のようなものをこしらえ，茶わんなどに浸して吸わせたのかも知れない。しかしこれは，西洋の場合のように人工栄養で用いた道具が沢山残って（Bond et al, 1981; Fildes, 1986など）いないので，正しくないかも知れない。

前論文でも触れたように，子どもたちは長期間乳を与えられており，したがって母乳も長く出たのであった。例えば，真吾を生んで2年8か月近くのときでも，おきくの乳は出ていた。それより4か月前に，真吾は茶呑み茶わんでこぼすこともなくほぼひとりで食事ができるようになっていたのである。ところで，西洋のように乳首の保護具を使うこともなかったが，母親の乳首が痛められたという記載は，行三郎の場合だけである<柏，弘 4. 9.23>。さて，長期間授乳するという習慣は，長期間多量の乳を呑むことの意義に関する民間の信念と結びついていたのかも知れない。事実，勝之助も同僚の子ども（数え年4歳）が病身である原因を，早く乳から離れたことに帰属させる話を記している<柏，弘 3. 6.14>。ついでながら，第1子を出産したある母親に乳が出ない原因を，彼女の過度の心配と結びつけた考えも見られた<柏，弘 3. 8.23>。他の原因もあってその母親は離縁され，子どもは「乳子」にだされたという。

また，きょうだいで授乳されていた例も記載されている。その母親も乳の出がよくなく，おなかのところへ赤ん坊の貰い乳にきていたのであるが，病気で生後7週間で死んでしまった。そのことを平太夫は，「兄坊の仕合わせ也」と書いている<桑，弘 3.12.22>。その他，平太夫は，数えの9歳の女児が疱瘡にかかったときに，「3つ4つの小児のごとくねだり」，乳を呑みたくてならぬといったので，家人が上記のような乳筒で摺り粉を呑ませた例を記載している<桑，弘 3. 4.27>。

さておりんが死んだ後，おきくは乳がはって困った。そこで真吾に頼んでも，「いやだいやだ」といって呑んでくれない。そのためおきくは乳を茶わんに絞りだすことになる<柏，弘 2.11.20>。しかしおきくが働きかけて4日ほどすると，昼間は決してしないが，夜になると真吾はこっそりとおきくの寝床に行き乳をのむようになった。これは真吾［3：6］にとっては，乳自体ではなく身体的接触と愛着の問題であろう。役所で父親と共寝しているときに，真吾は眠りながら父親の胸のあたりを探るので，勝之助は「おとっさと御役所で寝ているぜや」と気づかせたのである<柏，弘 2.12.18>。このような環境からの要請が契機となった真吾の心理的変化は，自己概念の領域にも及ぶのである（項目13参照）。

なお前論文でも触れたように，幼い子どもの飲酒は何ら問題視されておらず，真吾［2：0］も酒好きで赤くなった。飲まされるのは，みりんと清酒が主であった。真吾［5：6］がもとの守りの家に招かれて酔って帰ってきたときには，一角丸を飲ませたほどであった。桑名では家に出入りする親戚のものに酒好きのものが何人かいたし，勝之助も陣屋内のつきあいで頻繁に酒を飲み，すぐに大酔いしたのである。このようなおとなたちと入り交じった生活を日頃から子どもたちはしていたのであった。

3）排泄の訓練

前論文で述べたように，渡部家の子どもたちの排泄のしつけは早くから開始され，早期に完成していた。その後真吾は，夜に親が必要によって起こしてやれば寝小便はめったにしない。ときどき「不調法」をするので夜に3回起こされたのは，おりんが生まれた直後のことであった。大便に関しても，真吾はお祭りによばれていたその家からいったん「ウンコちに帰ったのだ」というように，かなりの時間コントロールできる段階［2：10］を経て，自分で便所に行ける段階［4：0］に達する。これは現在よりも不便で危険であった当時の便所を考えると決して遅くない。しかし，まだ自分で拭くことは要求してい

なかったのであろう。「エエゼイの声近所へ通り渡り候」<柏，弘 3．閏 5.14>という状態である。このように自立が進んでくるとかえって，夜に小便をちびって母親に叱られたときに，「そんならもっとたれてやるぞ」<柏，弘 3．9.20>などと開き直れるのかも知れない。

おりんについては記載が少ない。しかし夜もたびたびおしめを取り替えていたり，冬であるので朝に腰湯をつかわせて，清潔に心がけていたことは分かる。おりんの死の前夜，宿直で役所に真吾と泊まったとき，勝之助は次のように記している：「今夜はおろくはおきくと一つに寝るなり。たびたび小女の尻取り替えにてさぞ寒かろふと案じ申し候。」<柏，弘 2.11.19>。

行三郎に関してもあまり排泄の訓練に関する記載がない。出産当日だけでなく，その後も長い期間おきくの身体の不調が続いて，家事・育児ともに十分にできなかった事情を考えるとそれも無理ないことかも知れない。ただ，摺り粉や乳をよく呑むので，小便の量と回数が多いことに触れられているのが目立つ程度である。

4）身体の取り扱いと身辺の自立

子どもの身体の取り扱いについて重要な位置を占めるのが月代を剃ることと入浴・行水であることは，ここでも変わっていない。香月牛山（1703）は「本邦の俗礼にして，小児男女ともに4，5歳までは髪を剃る事なり。毎月4，5度あて剃りたるがよきなり。小児は熱つよきものゆへ，半月と髪を剃らねば，頭に瘡を生ずる類多し。」と書いているが，平太夫や勝之助・おきくは，普通それ以上の頻度で，子どもたちの月代を剃っていた。子どもの髪と身体の健康との結びつきは，たしかに平太夫たちも信じていたようである。例えば，平太夫の次のような記述がそれを表している：「鐐之助しら雲頭になり候につき，月代剃は毒じゃと申すことゆえ剃らずにおき候ところ，剃らぬも毒か，両眼赤くなりかかり候ゆえ，月代剃ってやる」<桑，天15．5．8>。

しかし，子どもから見れば，月代剃りや髪結いは自分の外見を整えたり，改まったところへ出かけることと結びついて重要性が増してくる。あれほど月代を嫌っていたおろくにも変化が見えて，自分から剃ってくれとねだるようになり［4：10］，勝之助に「年もとろふもの也」と書かせている<柏，天15．1.14>。真吾［2：8］も月代を剃ってもらうのが大好きであった。お隣（竹内）へ遊びに行っているおろくを，自分の月代が済んだ後で呼ばせると，真吾はいったものである：「あねちゃ，チョリチョリちんなへ。」と<柏，弘 1.12.30>。

毎日のように洗湯（銭湯）に行っていた鐐之助ほどではないが，勝之助の子どもたちも洗湯，貰い湯，それにときたまたてる家の風呂にはいり，そして行水をした。それには勝之助を中心として，おきく，竹内家の叔母さと運八郎，守りたちが手分けしてあたったが，おろく［5：0］がひとりで風呂に出はいりできるようになってからは楽になり，後には行三郎を含めた3人の子どもを勝之助が一人で洗湯に連れて行くこともでてきた。

着衣の自立に関しては鐐之助は遅れていた。例えば7歳2か月のときでも，朝にこたつで暖めておいた着物を出して着せてもらい，帯もしめてもらっていた。しかもその着物を遊びで汚したり濡らしたりするのはいつものことであった。見にくい目でおばばが洗濯をしても10日ともたない。着物を汚したり濡らしたりすることが，鐐之助がおばばに叱られる主要な原因の1つになっていた。

一方柏崎では，気候の問題もあるが，着物の数が足りない上に，おきくの身体の調子が悪いことが多かったので，子どもの着物だけではなく，おとなの着物も「汚れくさった」ままであることが再々あった。年少で通いの子守にそこまで期待することはできないし，おきくが気をもんでもなんともならないことが多かった。ようやく柏崎日記も終わりに近づく頃に，おろくがかなり子守と家事に役立つようになり，それにもとの子守の1人であったおさとが，有能な働き手としてときどき雇われるようになって，乳飲み子を常にかかえ，病人が絶えなかった勝之助一家の衣類や家事の状態も，徐々に好転していったのである。

なお，夏に鐐之助が寝るときに，腹あてをするとともに，頭を包んでいた<桑，弘 2．8.17など>のは興味深い。

5）身体接触・共寝と愛着・同一視

共寝の原理　前論文と同様に，「同じ部屋で寝る」のではなく，「同じふとんで寝る」という意味での共寝について述べよう。桑柏日記から拾い上げた事柄をもとにして，少し一般化して考えると，子どもが共寝する相手が変化するパターンの底に，3つの原理が働いているように思われる。

まず，少なくとも渡部家に関する限り，共寝は原則として2人を単位として行われるようである。一時的に大人1人と子ども2人という組み合わせもあるが，それは何かの便宜上，仮にとられる形で安定性がない。この1＋1というのがふとんの大きさという物理的条件とも無関係ではないのは当然である。そもそも「同じふとんで寝る」のは，身体接触の確保による心理的関係の維持だけのためではなく，とくに冬季に，限られた数のふとんで，家族が暖かく寝るという実際的機能をも果たしていたと考えられる。現に，勝之助が宿直する度ごとに役所の小使が勝之助の家からふとんを運んでいた。また，先に勝之助とおろく・真吾が寝ていて，仕事を終わったおきくが寝るときに，寒くてかなわないからといって真吾

を渡してくれと頼んだ<柏，弘 4．1．6>のもその現れであろう。そして，暖かい季節になってから，おろくが役所に泊まらずに家で1人で寝たことがあった<柏，弘 2．4．4など>のも，ふとんの融通がつくようになったためだと考えられる。

第2の原理は，年の若い夫婦を含む家族では，最年少の子どもが母親と一緒に寝るというものである。勝之助一家が桑名にいた最初のときには，当然鐐之助がおきくと寝ていたが，おろくの誕生とともに鐐之助ははみだし，おばばと寝ることとなった。そのとき，勝之助はすでに柏崎に単身赴任していたし，鐐之助が桑名に残ることもすでに決っていたであろうから，それが最善の方法であった。次にはおろくが，真吾の生まれるまでずっと母親と寝ることになる。そして真吾の誕生に伴い，おろくは父親と寝ざるをえなくなる。そして，おりんや行三郎が誕生すると，今度は真吾が父親と寝るようになり，おろくはときには父親・真吾と，あるいは真吾とだけ寝ることもあるが通常は1人で寝ることとなる。この間，おりんが死んだ後には，真吾は母親と，そしておろくは父親と寝るという以前のパターンに戻る。

前論文で述べた鐐之助とおろくの場合のように，下に赤ん坊が生まれたとたんに，上の子はもう母親からは離れるように導かれる。すでに2歳を超えている子どもの視点からしても，母親と新生児が一緒にいるという目の前の現実は，すでに自分が参入する余地はないのだということを知らせているものとして受けとめられよう。しかし，母親と寝ることは諦めるとしても，新しい共寝の対象にすぐ切り替えられるとは限らない。それは緊張を伴い，心理的抵抗を突破しなければならない移行である。おろくの場合には，竹内家の人々が移行のクッションとしての機能を果たしたのである。

また真吾の場合にも，母親に対する強い愛着が形成されていたが，他方でおりんの誕生の前から昼間によく役所へ遊びに行っていた。そしておろくがそこで泊まることも知っていたし，自分もおろくと一緒に夕方に役所に行き，そこで弁当を食べたこともある<柏，弘 1.12.29>。そのため，自分も泊まりたいという興味が出てきて，父親に誘われると泊まることを承知して，「生まれ落ちて始めて母を離れて寝候に付き，定めて夜中にはやかましくこれあるべしと案じ候ところ，自分より泊まろふと申して承知致し候に付き，何の事もなし。」<柏，弘 2．4.28>というような経験を経ていることも役立った。それに加えて，おろくが姉としての役割を果たしていたことも，下にきょうだいが生まれたときの共寝の対象の移行を容易にしたものと考えられる。なお，行三郎が生まれた後の一時期，竹内家が真吾を欲しがってしきりに誘ったので，真吾が竹内家に泊まることが何日も起こった<柏，弘 4．2.27；4.23>。しかし真吾に対する竹内家の人々の寵愛がいよいよ増すのを，勝之助は困ったものと考えていたのである。

共寝の相手の変化についての第3の原理は性別化である。前論文で述べた鐐之助の場合に，相手が祖母から祖父に移行したのにはこれが関係していたのではないだろうか。「共寝は同性の相手とする」という原理がいつ働きだすかには，子どもの性別を初めとした多くの要因が関与していると予想されるが，それを具体的に述べるためには，より年長の子どもや，性別と年齢によるさまざまな組み合わせのきょうだいを含んだ資料が必要である。柏崎日記の子どもたちの年齢が低いため，性別化の原理の働きが明確に現れていないのである。筆者が仮説として考える要因としては，年長者と一緒に寝る子どもの性別（男児の方に対して早期に適用される）や，異性のきょうだい間での共寝に関しては上の子どもの性別（母親の代理的役割が期待される女児の方が遅れて，すなわち，下の子どもが相当の年齢に達してから，適用される）などがある。

なお鐐之助の場合，桑名日記の終わりまで平太夫と寝ていた。平太夫が，柏崎にいれば3人の兄になり抱かれて寝るどころではあるまい，1人で寝ろと鐐之助にいったことはある<桑，弘 2．9.28>。しかし，祖父と一緒に寝るのが嬉しくてたまらないという鐐之助を，平太夫はいつも受け容れていたのである。

その他の問題　身体接触の他の面としては，前論文でも触れた「肌におぶう」や，「懐にいれる」ことがあげられ，寒い季節に幼い子どもがしてもらっていた。例えば父親と洗湯に行くときに，おろく［8：7］は行三郎［0：9］を肌におぶって行っている<柏，弘 4.11.9>。一般的なおんぶやだっこは子どもがかなり年長になってからもされている。とくに歩きにくい道ではそうで，例えば雪道の場合に，4歳8か月の真吾がおろく［7：9］におぶわれて役所に泊まりにきたりする。

赤ん坊の扱いで前論文の時期にはでてこなかったものに，いさ（藁で作ったかご）がある。おりんは七夜の日から昼間はいさで寝かされていたが，最初の頃はしごくおとなしく，「終日入れ置き候は余り可愛そふの様也」<柏，弘 2．9.13>と勝之助が書いている。おすみも生後8日のときからいさで寝かされている。専任の子守がいないときには，それは便利なものだったのであろう。そして行三郎のときにも初期からいさに入れる予定であったが，乳不足なので，乳沢山になるまで見合わせることにしたのである<柏，弘 4．1.28>。

真吾の場合は，鐐之助が平太夫に対して発展させたよ

うな同一視の行動的現れは記載されていない。鐐之助の場合には前論文で触れたように，すぐれた観察者であるおばばの存在もそれが記載されることに寄与していた可能性がある。ところで，勝之助と真吾の関係で興味深いのは，職住近接の条件もあって，父親の職業生活に真吾が関心を示していることである。勝之助が役所で容疑者の吟味をしているのを，真吾［3：11；4：5］が障子の穴から覗いたことがあった。家に帰った真吾が，「どろぼふがおとっさに叱られたけれども笑ふていたぜ」といっていっこうに恐ろしがらぬので，勝之助は，いつか拷問するときに見せてやろうと思ったのである<柏，弘 3．4．7>。

6）病気と医療

前論文からこの期間に持ち越されたのは，真吾の目の問題である。例の「胎毒」[3]の影響で左目の角膜に，取れそうで取れない「かかりもの」が残ったままであった。勝之助が右目を手で押さえていろいろのものを提示したところ，真吾がいうものの名前がたいてい当たっているので，おぼろげに見えているのであろうと勝之助は推測する<柏，弘 3．3.24>。名医の評判のある老僧から丸薬（下剤）と目薬をもらい，最初は嫌がっていた真吾［2：6］が自分で羽で目薬をつけることもあったし，また後に，別の医者から目の治療剤としての丸薬をもらったりした。後者の場合，毒絶ちの要求には困ったが，1，2か月で治るものならどのような制限でもするから，どうか治してやりたいものだとの父親の気持ちが記されている<柏，弘 3．3.24>。しかし，その年の5月6日には神社で目をよくしてくださいといって拝ませていたりしていて，かんたんには治らなかった。

ついでながら，名医の評判が高いのは多くの場合遠方の僧侶で，かつ，真吾の病気に関しては「きっと元通りになる」と保証した。そして実際，少なくとも最初は好転する傾向が見られた。一般的にいって，診断名をはっきりいう医者には勝之助は信頼感をもった。それに対して，診断に関して要領を得ない医者に対しては，「しろうとも同様也」と不満をもった。

行三郎を生んだ後のおきくの病気に関しては，何人もの医者にかかったが，病状が一貫して快方に向かうことがなく，勝之助もその診断と説明を信じたりまた不信に陥ったりを繰り返した。しかし，真吾の病気のために呼んだ入倉という60歳余りの巧者におきくも診てもらったところ，それまでの医者たちとは全然違った診断と説明をする。こちらから容体をいう前に脈をみて入倉がいうことが，ことごとくおきくの感じていることに当てはまるので，薬をもらうことにした<柏，弘 4．7.17>。それをきっかけにして，異常な渇きと腹部の不快感を主訴としたおきくの病状は次第によくなり，直ぐには動きだせないので家事が片付かないことを勝之助が不満に思うこともあったが<柏，弘 4．7.30>，身体も動きだし，ついに本復の見通しが立つようになった。行三郎の七夜の宴を正式にしたのは，そのときであった。

そのほか，活動的でそそっかしい鐐之助が怪我をしたり，真吾が火傷をしたり，また，子どももおとなたちも，発熱や下痢をしたり，瘧（マラリア様の間欠熱）を煩うということがよく起こった。かんたんな怪我・病気の場合には備え置きの薬を用いたり，民間療法で治すこともある。しかし急性で少し難しそうだと判断された場合には，すぐに医者を呼びにやった。それに対して，長期化する病気の場合や，慢性の皮膚病や乳不足のときには，民間療法のほかにまじないが使われた。例えば，虫気のある子どもに髪しらみをのませたり<柏，天15．6.16>，鐐之助の目に乳を入れたり<桑，天15.10.17>，さらには鐐之助のしら雲を特定の塚の榎の木に移すというまじない<桑，天15．5．8>や，おすみの咳を止めるために地蔵尊に願かけに行ったりする<桑，嘉 1．2.16>。その他にも，平太夫は病気の予防に関するいろいろの信念や信仰をもっていて，当時の人々がもっていた病気への対処法のレパートリーが相当広いものであったことを窺わせる。

7）移動と運動の発達

前論文の記述と同じく，平太夫と勝之助は子どもの身体発育についての情報を交換し，身長や掌の大きさを比べ合ったりしている。おろくはその後も大きな体格を維持し，4歳9か月頃には鐐之助の眉毛のところまでの身長があり，手形も鐐之助とほとんど変わらないほどであった。16，7歳になれば「大どた娘」になるだろうと平太夫たちは笑い合ったのである。そして，真吾の手形から，だいぶ肥えてきたのかと想像している<桑，天15．2.26>。そして10歳3か月のときの鐐之助を基準にすると，約2か月前のおろく［7：9頃］は前髪のはえ際のあたり，そして真吾［4：8頃］は乳の少し上という比較がなされてる。おろくはあい変わらず太っていた<桑，弘 4．3.21>。

運動発達が大幅に遅れていた真吾も，病気の回復後は徐々に行動発達が見られる。安定した歩行が見られるのは99週の頃で，103週のときには海岸を4，5町歩き通し，砂の上り坂になるので勝之助が抱いて上ると，下り

3）　真吾の症状は，アトピー性皮膚炎に2次感染を伴ったもののように思われるとの教示（北條博厚博士［静岡県立子ども病院副院長］'87．6.17日）に感謝する。

て歩こうといって大だだを起こした。また，105週のときにはさっさと2階に上がり，後から勝之助が支えようとすると，やめてくれと声をあげて叱った。「なかなかわやく太郎になり候。」と勝之助は記している<柏，天15．4.11>。

行三郎は母乳不足にもかかわらず，貰い乳もあり，また27週のときには「食い気」もついて食事時にはやかましく請求し，さつまいもなどの食物も摂っていたためか，堅太りで身体発育上の問題はこれといってなかった。運動発達の経過を見ると，なんでも摑み口に入れる［21週］，坐る［26週］，這う［(45)，53週］，そしてつかまり立ち［58週］となっている（丸括弧内は筆者による推定を示す)。這う頃から少し遅くなっているのは，肥満あるいは厚着のせいかも知れない。なお，おすみは25週で大分坐り，52週で歩いている。

一方，鐐之助はあまり太らず，夏などには日焼けして大きな目を光らせていた。運動量がきわめて多いので，下駄や草履の消耗が激しかった。例えば，草履下駄の台は2，3か月に1回取り替え，1年に2足は新しいのを買わなければならなかった<桑，天15．4．9>。臆病なところがあるくせに，せっかちで短気な鐐之助の安全を気にかけ，しかもその騒々しさに閉口しながらも，平太夫たちは活動的な鐐之助を受け容れていたのである。

8）遊び

鐐之助はあい変わらず遊び中心の生活を送っていた。その中心をなすのは，依然として凧と釣り・魚取りで，それは季節的に交代した。8歳の鐐之助は，釣りは子ども仲間の中で一番上手とさえ書かれている。凧もたんに作ってもらったり買ってもらうだけではなく，7歳半頃からは自分で「龍」の字を書いて古い骨にはったり，絵を写したりするようになった。その過程で，写した絵よりも描いた絵の方がよいと聞いて，絵を習わせてくれと平太夫に頼んだこともあった<桑，嘉 1．2.12>。

そのほか，太鼓；打きゅう；高足（竹足）；打ち上げ花火を模した，竹と紙による「のろし」の製作；こま；弓；水浴び；8歳の正月からの「おりは（折羽)」という双六ゲーム（紙を賭けてすることが多い）への熱中；花火に関しては製作・遊び・見物と多様な楽しみ；それに草摘み・茸狩りなど，多様な活動を行った。その過程で，ゲームを若手に教えてもらったり，おとな・若手・仲間と釣り・魚すくいに行ったりそのための道具を作ってもらったり，茸狩りには家族，近隣の人々，あるいは仲間と出かけるなど，多様な人々との接触を経験した。また，遊びとはいえ，魚取りや茸狩りなどで得たものは，自分の家の食卓に供したり，来訪した人へのおみやげにも使われるなど，経済的価値をももっていたのである。

他方，真吾もそれなりに遊びの世界を広げていった。太鼓，竹馬，弓，くい打ち，凧などの道具を使った遊びのほかに，蛍狩り・茸狩り，雪こねや浜での遊びなど自然の中での活動，さらには鬼ごっこに加わったり，神社や寺や花火見物につれてもらうなど，鐐之助ほどではないが，親，守り，姉，そして竹内運八郎などに経験の機会を与えられている。しかし，真吾の遊びに対しての勝之助の態度には，平太夫ほど子ども中心とはいえないところがある。例えば，真吾が蛍を取ってきたのに入れ物がなかっても無視したこともあったし，また，真吾が凧を欲しがっているが，作ってやると上げてやらねばならず面倒なので，まずできるだけ口でごまかしておいたこと<柏，弘 2．2.16>もあったのである。

しかし，勤務と家事に追われ，また経済的な心配も絶えない勝之助にも，ときには子どもたちとゆとりをもって接することのできる日もあった。おろく・真吾をつれて番神に参詣がてらピクニックにでかけた日の記述は実にのどかで，子どもたちもビイドロのおもちゃを買ってもらったりしている<柏，弘 3．5．6>。

一方，おろくの方も遊びに関心はあり，仲間や真吾と遊ぶことはあったが，それほどの展開は示さなかった。その理由として，子守と家事の負担がだんだんと増えてきたことがあげられる（項目18を参照)。しかし，食用の草摘みや茸狩りなどには，実用的価値だけではなくて，楽しみの要素も多く含まれていたことは，茸狩りのシーズンになると，おろくが連れて行ってくれとしきりに勝之助にねだったことからも想像できる。また，子ども仲間での寄り合い（項目16を参照）のときは，紙を賭けたゲームを含む種々の遊びを楽しんだことであろう。

9）社会的反応と言語発達

子どもの社会的コミュニケーションの能力の発達は，やはりおとなたちの主要な関心事の1つであった。そして，その第1ステップとして，微笑反応の出現に注意を向けている。まず，いさ（項目5参照）の中で目覚めたおりん［9週］が少しずつ笑うという記述があり，その8日後の彼女が死んだ日の朝にも，宿直から帰った勝之助が抱いて，こたつに入って相手をしていると，おりんは少しにこついたのである<柏，弘 2.11.20>。おろくが役所へ勝之助を呼びにきたのは，それから3時間ほど後のことであった。

行三郎の場合にも，働きかけて相手するとたまには笑う［5週］，少しずつ笑う［6週］，そして，少し笑い，そろそろ愛らしくなってきた［8週］<柏，弘 4．3．17>というように細かく記述されている。そして，その次に記載されているのは今日いうクーイング（cooing）で，行三郎［13週］は上機嫌で「笑ひ語り」した。おろ

くが行三郎［28週］をおぶって遊びに出たが，かれは愛嬌よしで常ににこにこしているので皆が相手になってくれ，仕合わせだと勝之助は書いている<柏，弘 4．8．12>。このように，個体側の条件が，かれ自身の環境を形づくって行ったのである。おすみの場合にも，「もはや笑ひそうな顔つきなれども笑はず」［6週］が，「漸くゑろふよう笑ふようになり，愛らしくなる」［9週］という変化や，指差しの出現［1：2］に関心が向けられている。

さて真吾の場合，言葉の出現も遅れていたが，「いふことは出来ずとも手まねいたし」というように，身振りによるコミュニケーションを使い［1：9］，這うことをやめた頃［1：10］から文を話し始め，2歳になる直前には，父親と風呂に行った帰りに上機嫌で，「道々唄ふて帰る」と書かれている<柏，弘 1．4．2>。そして，それから4か月したときには，草履下駄も結びつける必要なしにさっさと歩き，大概のことは片言まじりでしゃべるようになっている。すでに示した例（項目4）からも分かるように，2歳後半の真吾は，おろくを「アネチャ」と呼んでいた。自分を「ボウチャ」といったのは，そのように呼ばれていたからであろう。大晦日に一家で年越しをした後で真吾はいった：「ボウチャ4チ，アネチャ7チ，大きくなった。」<柏，弘 1.12.30>。そして，発音上の問題がまだ残っているのは当然であるが，4歳1か月のときには，1人で役所まできて，母親からの伝言を父親に伝えているのである。

10）認知発達

ここでは幼児期の認知発達に関する記述のいくつかを取り上げることにする。1歳9か月の真吾を，守りの弓はよく自分の家に連れていって，ままごとなどをして守りをした。弓の家では，母も兄の八十七（数えで13歳くらい）もたいへん真吾をかわいがった。とくに母親が真吾の示す行動に興味をもち，おぼふ様（真吾）がいろいろと示す面白くおかしい行動を見ていて仕事にならないほどだと勝之助に報告する。例えば，風邪で寝ている八十七のところへきせるをもって行って，煙草をのめといってその口にきせるを押し込んだり，茶わんをもって行って，口移しに茶を飲ませるまねをする<柏，天15．1.28>。これは1歳台の子どもがよく示す行動である。また，その年の春以来，弓の家に買い物にきた客が銭を出すのを真吾が待っていて，それをかき集めて銭箱の穴から入れるようになった。それを自分の「役前」のように心得ているので，弓の家族は真吾のことを「米屋の番頭さん」と呼んでいる。あるいは，芝居の身振りをして通る乞食を見てからは，毎日役者の身振りをして（延滞模倣）弓の家族を笑わせる<柏，天15．7.20>。

このような話を聞いたり，その模倣を家でも見た勝之助夫婦もそれを面白がり，眉をひそめたりはしない（平太夫も「米屋の番頭」の話を面白がっている<桑，天15．10.11>）。かれらは，そのような「ひょうげ」をプラスの対人的態度として評価しているようであり，ひょうげた行動は強化される。そしてその1年後にも，訪ねてきた弓の母親に大喜びする真吾の行動を，「いろいろ芸を致して御機嫌を取る」<柏，弘 2．8．1>と記述しているのである。真吾の行動を，社交性・社会性の現れだと考えて，それを重視・奨励するという勝之助たちの構えが，そこに反映されているようである。

4歳になる頃から，真吾はいろいろの疑問をもち，親に問うようになる。水車を初めて見て怖がった真吾［4：0］は「どふしてああなるのだへ」と聞き，勝之助に説明してもらうと合点して近くに寄って見る。また，「手のひじは誰が付けてくれたんだへ」とか，夜に寝ているときに海鳴りを聞いて，「海は誰が掘って水を入れたんだへ」といった，Piaget のいう「人工論」的な疑問を提出する。この後者の問いに対して勝之助が「元からあるのさ」と答えたところ，真吾［4：8］はいった：「そうかへ。そうでも誰か掘らんけりゃ深くならん。町のものでも鍬で掘ったろうか。」<柏，弘 3.12.28>。このように「何でも不審に相なりさまざまのことを尋ねる」真吾のことを，平太夫が，「合点の行かぬことを覚えようとて聞くもの也。」<桑，弘 4．3.21>と解説しているのは興味深い。

しかし，真吾には「訳けのわかっていない」ところももちろんあって，善光寺地震の余震がまだ続いていた頃に次のようなエピソードが記されている。かれ［5：3］は地震というものは何か形のあるものと思っているらしく，「地震」と聞くと外へ出て見る。そして，「おや，地震はどこへ行ってしまったろふ。地震が見たくて見たくてならん。」といったそうである<柏，弘 4．8．7>。周囲のものが，「地震だ」といって外に飛び出すことから，真吾はそのような理解を発展させたのであろう。

さて行三郎については，かれの活動性・反応性が増すのを勝之助は「日ましに智恵つき」と表現している。そして10か月前の頃には事態の理解もできるようになり，勝之助が真吾をつれて宿直に行こうとするのに気づき自分も行こうといって泣きだしたのである<柏，弘 4.11．23>。

11）知的技能の獲得

前論文で述べたように，鐐之助の知的学習に対して平太夫がやや積極的な姿勢を見せ始めたのは，鐐之助が7歳近くになってからのことであった。それからも，鐐之助は伯父の佐藤留五郎の家にゆき，かれや若手のものから手習いと素読を学んで行くのであるが，7歳2か月の

ときに，町内の子どもが皆習いに行っている丸山へ，自分も行きたいといい出す。仲間と一緒のところで習いたいというのである。そこで平太夫が藩士の丸山に頼みに行き，朝早くからの素読（朝読み）と手習いに通うことになった。そこで敷くござや書物のカヴァーを平太夫に作ってもらい，鐐之助は大喜びで丸山に通い始める<桑，天15．2．4>。

丸山では休みになることも多く，また佐藤へ行っていたときほど丁寧な指導は受けられず，清書の出来栄えももう一つであった。しかし，子ども同士の遊びから外れてもいけないと思い，平太夫はそのまま丸山に通わせることにした。また朝読みにしても，鐐之助は早く行くことに意味を見出していて，1番になったときは喜ぶが，朝起こしてもらうのが遅れると不機嫌になり，「読みに行かぬ」という<桑，天15．4．4>。つまり，学習に内発的に動機づけられているとはいえないのが鐐之助の状態である。遊びに関心が向いて復習をしないから，大学や論語を復させてみても，忘れてしまったりつっかえたりする箇所が多くなる。

しかし，書物に関しては不熱心な鐐之助であるが，手習いには興味をもった。1度で清書に合格して喜んでもって帰ったところ，おなかが誰かに手を添えてもらって書いたのであろうといったので，鐐之助［7：6］はひどく腹を立てた。佐藤では皆が指図してくれるからよくできるけれども，丸山では誰も教えてくれるものがないからよくできぬ。それを今度はせっかく骨折って1回で上がったのに，手伝ってもらったなんていうから，もうこれからは清書は家にもって帰らないと，顔色を変えて鐐之助は怒った。鐐之助はそのことを後から帰ってきた平太夫にも訴えた。平太夫に漸くなだめられて鐐之助は機嫌を直したが<桑，天15．6．2>，おなかのことばによって一時かれの自尊心は著しく傷つけられたのである。

実際，鐐之助は書には才能もあったし，また打ち込んだものと思われる。平太夫が柏崎に送る鐐之助の書初めや清書は，勝之助やかれの同僚を驚かせる出来栄えであった。とくに，師匠が藤井に代わってからの進歩は著しく，送られてきた清書のことを，「誰に見せ候ても，天晴れと誉られ候。」と勝之助が書いたほどである<柏，嘉1．3．7>。鐐之助の遺筆は，澤下春男[4]によると，若さに似ない枯れた味のものであり，また，真吾も系図の中で，若くして死んだ兄については，「学芸ノ内最モ習字ヲ励ミ書ヲ能クセリ」と記している。

しかし，少なくとも桑名日記の期間中に関する限り，複数の師匠のもとに通いながら，鐐之助は他の学問には身が入らなかった。かれが助読というチューター役を務めたこともある<桑，弘3．8．6>。しかし，勝之助が何回も日記に書いているような柏崎での藩士の子弟の高い学習達成水準の例を平太夫が引合に出して，鐐之助に学習させようとしても，効果はなかった。例えば，平太夫が勝之助からの手紙を読み聞かせ，「柏崎の子どもは十歳にて四書五経まで済んだものが幾たりもあるから，鐐之助殺生と凧揚げより書物と手習い精出し候ように頼むと言ってきた。もし精が出ずばそう言ってよこしてくれ。さっそく迎ひに行くと言ってよこしたがどうだ。」といっても鐐之助は当惑してため息をつくばかりであった<桑，弘2．1．9>。そして，後に似た手を使って平太夫が鐐之助をコントロールしようとしたときにも，鐐之助はそのことを気にはしたが，それが学習に持続的に取り組ませるという効果はあまりなかった<桑，弘4.10.16>。

桑名藩にはもちろん藩校があり，町方の学問所もできていた。また，平太夫が鐐之助に城内の学校を見せたこともある<桑，弘3．1.11>。しかし，少なくとも桑名日記の期間中には，鐐之助だけではなく，かれの仲間である舞台格の藩士の子弟も，そこには通わなかったようである。それに対して柏崎の学校（学問所）には，適当な年齢に達した陣屋勤務の藩士の男の子どもはみな通ったと思われる。それ以外にも勝之助の家で個人的に教えてもらう子どももあった。陣屋では毎年学校の生徒に対する公的な試験があり，その前には質問をもって勝之助の家を訪ねてくる生徒が何人もいた。このような条件が，柏崎では桑名で例がないほど学習が進捗し，藩から表彰されるものを輩出させるように作用したのであろう。

このような環境の影響のもとで，真吾も早くから学習に興味をもち，父親に教えてもらって唐詩選の五言絶句を空読みで覚えたり［5：6］（大声で練習するので，おきくとおろくも覚えた），大学の素読を始め［5：9］たりした。真吾の学習は，勝之助の職場や宿直の部屋でも続けられ，成果があがり始めていた。ずっと先の話になるが，藩士の学問は武術の修練と同様に継続して続けられるものであり，真吾も18歳のときに「学問追々会得」したため，かつての勝之助のように藩から近思録1部を受けている。そして25歳のときには，「学問出精学力長ぜし」旨の表彰を受けている。

それに比較して，おろくの学習は軽んじられた。7歳8か月のときにいろはと数字の学習が終わり，手習いに入るが本人はむしろ糸引きに関心があった。そのうえ，行三郎が生まれてからはおろくは子守にかかってしまい，手習いはすぐに中断した。そして漸く1年以上もたって

4）　個人的コミュニケーション，1986年8月

から，勝之助はおろくの手習いを再開した。そのときおろくは，8歳10か月になっていたし，真吾がすでに大学を始めていたのである。しかし，勝之助たちがおろくの学習に無関心だったのではない。7歳頃のおろくの清書が桑名に送られたこともあったのである<桑，弘 3. 5. 14>。

12）性的関心

前論文でかなりの件数をあげることのできた鐐之助の性に関する言動は，その後平太夫の記述からはぴたりと影を潜めた。この期間中も鐐之助が若手と接触をもち続けたことや，平太夫が記載する町の性の風儀の緩みの例からすると，外的環境自体が急激に変わったとは思えない。鐐之助の全生活の領域の内で平太夫の記述がカヴァーする部分が，相対的に減ったこともあるかも知れないが，上記の変化はむしろ，鐐之助が7歳を過ぎた頃から，家族を含む周囲のものが鐐之助が示す性に関する言動に反応するやり方を変えたことの影響か，あるいは，鐐之助の関心が他の領域に向けられた結果を反映したものではないかと考えられる。

真吾に関してはまだ年齢が小さいことと，狭い陣屋が中心の生活で，鐐之助のように地域に根を下ろした若手のものと多様な接触をもたなかったことも関係してか，性的な内容の言動はほとんど記録されていない。3歳2か月のときに，「大口をききひょうげる」という記載があり，それは鐐之助やおろくと似た時期の出現である。また，「おかっさ，チンポコの隣はキン玉，キン玉の隣は尻の穴だねへ。どふして尻に穴があるだろふ。」［4：5］というのも，項目10で述べた知的好奇心が中心となった発問であろう。それらがその後に何かの展開を示したのかどうかは，不明である。

13）自己の発達

自分が努力を傾けてなし遂げた清書に対してけちをつけられたので，鐐之助［7：6］が色をなして怒ったことは，すでに項目11で述べた通りである。これは，以前に見られたような周囲のものの反応に支えられた自己評価ではなく，自分の努力の感覚と結びついた自己効力感・自尊心の現れといえよう。それは，かれのメンター（mentor）であった佐藤留五郎たちの指導を受けつつ，形成されたものと考えられる。釣りや凧に関しても，つねに有能な祖父や若手の援助・指導を受けながら，徐々に自分でできる部分を増やして行くことによって，鐐之助は技能を高めて行った。そして，それを仲間とや自分1人での活動の際に使って見ることによって，自分の投入した努力の手ごたえを確認して行ったものと考えられる。以上のような，いくつかの領域での技能獲得は，他者のプラスの評価に基づいた幼児期の自己評価とは違った，客観的で現実と結びついた自己像を形成し，自己評価をして行く上で大きな役割を果たしたものと思われる。

それに対してパーソナリティの領域では，鐐之助が自分の臆病さを客観視して，その克服を課題としたようには思えない。幼い頃からそうであったが，桑名日記が終わりに近づく頃になるまで，鐐之助が臆病で怖がりであることを示すエピソードが何回も出てくる。例えば，大雨のときに堤防が切れるのではないかという不安のために眠れなかったり，雷が強く鳴らないとよいのにとすくんだり，異国船がいつ攻めてくるかと心配したり，あるいはまた，花火が破裂するといけないからといって遠くへ逃げて見物したりする。このようなときに，人に笑われても鐐之助は気にならない。そして平太夫も，孫の臆病さをとくに困ったこととはとらえておらず，「鐐之助大臆病ものにて……」と書いている調子は，むしろ面白がっているようにも思える<桑，弘 4. 4.29>。項目17で述べるように，平太夫夫婦は鐐之助の行動をコントロールする手段として，鐐之助の不安に訴える心理的統制をよく用いた。鐐之助が予期的な不安をもちやすいことは，そのようなコントロールの効果を高めるであろうし，逆に，そのようなテクニックは鐐之助の不安感受性を高めるという循環的関係が働いたのかも知れない。

なお，天保15年10月に公儀姫君の名に遠慮して，録之助とでも改名しなければなるまいと平太夫とおばばが話し合っているのを傍らで聞いていた鐐之助は，それがよかろうといっていたが，丸山へ行って早速に「録之助と名をかえた」と宣伝した。しかし，その必要はないとのことで，その年のうちにもとの名前に戻している<桑，弘 1.12.20>。

真吾が年越しして数えの4歳になったとき（項目9の例），「大きくなった」といって両手を振り上げて見せて，父親に抱いてみろといった。そこで勝之助が抱いてやってこれは重いというと，真吾［2：8］は大喜びした。それは「大きくなった自分」というプラスの自己像がまとまりつつあることの現れであろう。それは，すでに述べたように，「自分でするのだ」と主張して，父親の援助を拒否する姿勢（項目7を参照）を1つの基礎として発達してきたものと考えられる。

真吾の自己像の形成にはおろくの存在も影響していて，「姉と同じような自分」というカテゴリー化が働いているものと考えられる。姉と同じように月代を剃って髪を結ってほしいという要求［2：9］や，自分の下駄も草履下駄もいやだといって履かず，おろくの大下駄をばたりばたりと引っ掛けて歩き，ついに洗湯まで行ってしまう行動［2：10］などは，その見事な現れである。そう

すると，おろくにかえって弟とは違う自分を確立する必要がでてくる。おろくは，自分の大好きなおゆきに真吾がおぶわれているのが羨ましくて仕方がない。しかし，大きななりをしている自分［5：11］の姿を知ってか，負われようともいわずおとなしくしていた。そして，おろくがちり毛に灸を21も，力んで泣かずにすえたとき，真吾［3：3］も「おれも泣かんですへる」と頑張っては見たものの，1つだけでこりごりして逃げて行ってしまった。

自己を規定するときにきょうだいの位置づけが関係する興味深い例が，真吾において見られる。すでに述べたように（項目2），おりんの死後に母親からの働きかけがきっかけになって，真吾はいったん思い切った母親の乳房を，夜はしゃぶるようになった。そして，「真吾申すには，おれはもはやアンチャではなへ。おりんが死んだから，おれがまたネンネになったのだなどと，子ども同士話してきかせ，少しも恥ずかしき様子なし……。」というように，自分の行動と一貫した自己像を再構成したのである<柏，弘 2.12. 9>。

しかし，よその人に，夜になるとまだ乳を呑みますといわれるのを真吾はだんだん嫌がるようになる。よその人には自分が乳を呑むというなと父親にいい［3：11］，4歳2か月のときには，次のような記述がある。その年の七夕から，真吾も仲間に加えてもらったので，子どもが5文，10文の銭を集めにくる。真吾が大喜びで，「おれも七夕祭りに交じった。もう大きくなったからだねえェ……。」というので，勝之助が「それでも乳を呑むのはどふいふものだ。」という。そういわれた真吾は，「エ……おとっさの馬鹿めがなあ」などといって，顔を赤くした<柏，弘 3. 6.17>。

鐐之助と同様に真吾にも臆病なところがあり，3歳では鉄砲の音を嫌がり，4歳台のときには海の波がうねるのや雷を怖がった。しかし一方で自覚もできてきて，上下着（項目1を参照）の宴のときには，自分のお祝いだから眠たくないと最後まで起きていた。

おろくの自己を規定する重要な要因に着物がある。おきくもそうであったが，おろくは陣屋の他の子どもと比べて貧しい身なりをしていて，祭りや外出のときにはとくにひけ目に感じていた。そのため，ほんの少しのゆとりができたのであろうか，おきくの着物を直して着られるようになったり［7：4］，1年に1回，縮みの着物で寺参りできるのをずっと前から楽しみにした［8：3］のであった。

14）養育者－子ども関係と社会的ネットワーク

ここでは，渡部家の子どもたちの主たる養育者以外の重要な人物をあげることにする。ただし，きょうだいや仲間は別の項目で扱う。まず，鐐之助の場合は，依然として親戚のおとなと若手を中心とする男性が，かれに種々の指導と援助を与えてくれた。その中でも中心となったのは，前論文で鐐之助のメンターであると規定した佐藤留五郎であった。しかしかれは，おなかの離婚とからんで，[5] 弘化3年夏頃から渡部家との接触が極端に少なくなり，後に江戸勤番となり去って行った。しかし，鐐之助はすでに学問に関しては別の師匠たちについていたことと，もともと多人数からなる社会的ネットワークをもっていたこと，そして同輩と過ごす時間が増えていたことにより，大きな心理的ダメージを受けることは避けられたものと思われる。しかし，急に理由も分からず留五郎との接触がなくなったことが，一時的にせよ何らかの影響を鐐之助に与えた可能性は残る。

次に，柏崎の勝之助の子どもたちの心理的生活にとって大きな意味をもったのは，一方では渡部家に出入りした町方の人々であり，他方には竹内家の叔母さと運八郎とがいた。もちろん勝之助一家は陣屋の藩士やその家族とつながりをもち，とくに行三郎の貰い乳の場合や，勝之助が勤務または出張，おきくは病気，手伝いの女は頼めないといった困った状況では，藩士の家族の援助が大きな支えとなった。しかし，裏方として勝之助一家を支え，子どもたちの生活に深くかかわったのは，むしろ町方の人々だった。おろくと真吾は，よく町方の祭りに招かれた。そして，そこからは，盆や正月に勝之助の家に挨拶（盆礼・年礼）にやってきた。

とくに，もとの子守の中で，おゆき（母親，夫）とお弓（母親，兄）は家族ぐるみで，おろく・真吾と深いかかわりをもつとともに，勝之助・おきくにとってもなくてはならない存在であった。おゆきとその母親がおろくを深く愛し，おろくも彼女たちに愛着したように，お弓の家族は真吾を心底から可愛がり，真吾もお弓とその家族との接触をことのほか喜んだのである<柏，天15. 1. 15など>。このように，子どもとその子守との心理的・社会的な結びつきが基盤になって，勝之助一家にとって

5）　おなかは結婚後わずか6か月で離縁となったが，その過程で，平太夫は留五郎を再三非難している。留五郎とおなかの間になにかあったことはほぼ確実で，もしかすると，おなかの結婚のかなり以前の日記の記述<桑，弘 2. 3.10>は，それを暗示しているのかも知れない。澤下・澤下（1984）は，おすみを留五郎との子どもかも知れないと推量しているが，少なくとも平太夫たちがそのように受けとめていたらしいことを窺わせる記述が確かにある：<桑，弘 3.12.16；4. 1.10>。

も子守の家族にとっても，その社会的世界が展開して行ったのは興味深い現象である。

次に竹内家は，この期間中も勝之助一家に対する重要な支援者であり続けた。真吾にとって，下の子の誕生によって要求された共寝の相手の移行には，クッションとしての竹内家の存在が重要な意味をもったこと（姉と寝るのも父親と寝るのもいやで，おじさと寝たい<柏，弘 4．2．9>）は，すでに項目5で述べた通りである。ここでも，子どもとの心理的・社会的結びつきが橋渡しとなって，両家のかかわりが深まったといえる。すでに述べたように，運八郎がなかなか妻運に恵まれず跡取りも得られないので，行三郎の誕生後にも真吾をもらおうとして，竹内家では本人にも勝之助にも働きかけた<柏，弘 4．4.29>。「桑名へ行かんけりゃならんもの，誰が……」<柏，弘 4．2．4>といっていた真吾も，一時は「おれは竹内のものになるからおれのものもって行くから，あねさ手伝ってくりゃへ。」といい，おもちゃを全部お隣に運んで泊まったこともあった<柏，弘 4．4．27>。しかしそれも長続きせず，行三郎が社会的反応性を増してくると，叔母さの関心は行三郎に移る。「お隣の衆もはや真吾どころではなし。叔母さのお稼ぎ手も小僧にかかり，仕事打ち忘れてかかり合ふておいでなされ候。」<柏，弘 4．6.25>という状態になる。行三郎の顔を見ると，叔母さは抱かなくてはいられないのであった<柏，弘 4．8．4>。このように，子ども自身がもつ特徴の変化も，それを取り巻く社会的環境の違いを生みだす要因として働きうるのである。

15）きょうだい関係

一般的にいって，下の子どもにとっての兄・姉ほどには，上の子どもにとっての弟・妹は意味をもたない存在であるのかも知れない。しかし今回の例では，周囲のものが直接に相互接触のないきょうだいを，どのようにして現実的な意味をもった存在として感じさせようとするかのやり方も，きょうだい意識の形成にかかわっていると考えられる。

鐐之助は，柏崎からの手紙と日記によって，おろく以下のきょうだいに関する情報を多く得ていた。しかし，自分より有能でなく，また世話すべき対象としての受けとめも十分ではなかった弟・妹たちが，鐐之助の心理的な生活の中で重要な位置を占めることはなかった。事実，項目5の例で示したように，「柏崎にいれば3人の兄になり……」という平太夫のいい方は，鐐之助に積極的に兄としての自覚をもたせようとするものではなく，そのメッセージは逆の意味を伝えたであろう。また，勝之助が繰り返し柏崎での生活の難渋を訴えることも関係して，柏崎に依然としてプラスのイメージを持ちにくい鐐之助であった。おじいさが死ねば，「このゑゝ家を置いて柏崎のびんぼう家へ行かんけりゃならんから」といって，風邪あがりの平太夫が湯に行くのを鐐之助がとめたので，「皆々おかしがり大笑ひ」したのである<桑，弘 2.12.21>。

それに対して，前論文でのおろくにとって鐐之助が現実的な意味をもったように，真吾にとって，まだ見ぬ鐐之助が兄としての意味をだんだん獲得するようになって行った。まず真吾は，鐐之助の清書や手形を見ると，くる人に見せ［3：5］，「オラモ桑名へ行きたい。」，「アンチャに凧揚げてもらふは」［3：7］といい，また正月で一家が揃っているときに［3：8］，何の気なしに「桑名のアンチャも呼びたへなあ・・」といったりする。そして，日記読みを聞いていた真吾［4：5］が，「鐐之助とは誰のことだい。」と尋ね，教えてもらうと，「アンチャにも名があるかへ」といったりし始める。「兄チャはもふ大きいから……」といったのは，真吾がちょうど5歳のときであった（エピローグ参照）。

下の子が生まれたばかりのときは，上の子は下の子に大変興味を示す。おろくだけでなく，真吾もおりんと行三郎に対してたいへん興味を示した。おりんが生まれると真吾［3：4］は，外で長く遊ばず，おもちゃをいろいろもってきて「ネンネにやるのだ」といった。また，「おれはネンネの兄サだね」と来る人に確認を求め，おりんの泣き声を聞くと外から飛んで帰ってきて，「ネンネ，なんだって泣かせなる。アンチャが見たへって泣くのかへ。」と，兄としての自覚をもち，たいへんな可愛がりようであった<柏，弘 2．9．8>。そしておりんが死んだときには，おろくは一度大泣きをし，真吾は日に何十回となく自分の顔をおりんにつけたのである。

行三郎の場合には，おろくと真吾が行三郎を抱こうとしてせりあったこともある。また，行三郎をおぶっているおろくに対してむりやり背伸びしたり，おろくをむりにしゃがませて，真吾は行三郎にほほをくっつけようとした<柏，弘 4．3.14>。おろくは，最初は行三郎を長時間おぶうのをいやがっていたが，やがて役目としてするようになり，行三郎もそれに慣れて，おきくの背よりはおろくの背でよく眠るようにさえなった。

下の子が行動能力を獲得してくると，上の子との間に葛藤も生じるようになる。真吾［2：6］はおゆきのところで3つもらったまんじゅうのうちの2つを「姉チャにやる」といってふところに入れてくることもあれば，きょうだいげんかでおろくを泣かせることもあった［2：8］。項目13で述べたように，この頃に真吾は「姉と同じような自分」というカテゴリー化をし始めたものと考えられる。しかしそれと同時に，真吾はおろくに依存す

る側面もあった。すでに述べたように，4歳の後半になっても真吾は3歳上のおろくにおぶわれることがあった。それが，真吾の自己概念に何らかの影響を及ぼしたのかどうかは分からないが，今日のわれわれが考える依存性のようなものとは関係がないかも知れない。

ところでもちろん，下の子が上記のようなカテゴリー化をするようになる以前でも，きょうだいげんかは生じる。行三郎［1：0］が這って真吾のおもちゃをかきまわしに行くと，それはけんかの種となった。

きょうだい間のもめごとが起こるもう1つの場合は，役割意識や規範意識をもった上の子が下の子をコントロールしようとして，下の子が従わないときである。いつものように竹内へ泊まりに行こうとする真吾に，おろく［7：10］が「もふ（おきくの）おびやが明けたで，家でおれと一緒に寝やれ。」といったのに真吾が従わず，おろくがやらせまいとしてしがみつき，両方が大泣きした。そのとき一杯機嫌で眠っていた勝之助は，おろくの方を叱ったのである<柏，弘 4．2．9>。

16）仲間関係

7歳を超えた鐐之助には，年齢のあまり違わない仲間と一緒に行う活動がますます増えていった。釣りや魚取り，茸狩り，草摘みといった採取を伴う活動；花火作りやのろし遊びのような製作活動を含む遊び；相撲・試合・花火・虫送りのような行事・祭りなどの見物；とんど焼きのような子どもの行事への参加；それに，山や浜への遠出など，多様な活動が仲間と行われた。

もちろん鐐之助はこれらの活動を，いつも仲間とだけしていたのではない。祖父母や，項目14で触れたような種々のおとなや若手が，鐐之助を，あるいは鐐之助とその仲間とをいろいろのところへ連れだしたのである。子どもだけでどこかへ出かけることもあるが，鐐之助の安全に気を配っていた平太夫たちは，子ども仲間だけの活動にはある制限を加えていた。また，平太夫だけに限らず，一般的に子どもを1人で行動させることはあまりなく，割合に近い所でも連れて行ったり送ったりすることが多かった。つまり，前論文でも触れたように，子どもはたいていだれかとともに過ごしていて，1人でいたり，単独で活動することは少なかったのではないかと考えられる。

そのような社会的文脈の中で，仲間がだんだん大きな位置を占めるようになって行くのである。ところで上記の例には，共同の目的に向けた組織的な活動が含まれていたが，仲間関係は，それ以外のタイプの活動においても重要性を増してくる。その1つは，すでに項目11で述べた学習活動が例になる。すなわち，手習いや書物の学習は，基本的には個人を単位として進行するものであるから，単独で師匠についてもよい。しかし鐐之助は，近所の仲間と同じ師匠の下で習いたいといい出したのであった。そして平太夫も鐐之助が仲間からはずれてもよくないと考えて，その希望通りにしてやったのである。つまり，子どもたちは，共通性はあるがそれぞれの目標に向かって，同じ場で活動するのである。

もう1つのタイプは，活動の内容はさまざまであってもよいが，同じ場所に集まって相互作用をもつことに力点が置かれる場合である。鐐之助の年齢では，まだ純粋にそのような性格をもった仲間活動はない。しかし，平太夫の家にはよく若手やおとなが集まってきて，仕事をしたり本を読んだりして時間を過ごしていた。項目18で述べるように，鐐之助が内職で網すきをしようとしたときには，その場を利用したのである。そこではかれの1，2歳年長の仲間もきて，網をすいていたのである。

おろくの場合は，前論文でも触れたように，広い仲間関係を発展させることはなかった。また，項目18で述べるように，自分の家の子守や家事に時間を取られるようになると，毎日自由に遊ぶことはできなくなった。しかし彼女も，半ば制度化された子どもの会合には出て，遊んだり食べたりするという経験をもった。その1つは「子ども客」である。これは各家庭が催して，子どもを相互に招き合うものである。勝之助の子どももその客に招かれるとともに，それを負担に感じながらも，勝之助は家でもそれを開かざるをえなかった。なお，この「子ども客」は，他の「客」とともに，陣屋の社会的生活の仕組みの一環をなしていることは，4のセクションで述べる。それと並んで，正月を中心にして，各家庭で開かれる「子ども会」または「子どもの寄り合い」も，子どもたちでゲームなどをして楽しむ機会であった。おろくは数えの7歳のときからそれに出始め，8歳の正月には幾つもの寄り合いに出ている。

真吾の場合は，年少であることもあって，本格的な仲間関係はまだ発展していない。かれの社会的ネットワークの中心を構成するのは，おとなとお弓・八十七のような年長の子どもに，おろくである。しかし3歳前後の頃から，おろくから離れて，自分の相手を連れてきて遊ぶという変化も見られた<柏，弘 2．5．5>。この頃にはまた，父親の同僚の子どもと仲よく遊んだという記述もときどき出てくる。そして数えの5歳から七夕の仲間に加入したことは，真吾が地域の子ども集団に加入して行く第一歩であった。しかし，いうまでもなく真吾の生活の中心は家庭であった。

17）行動統制ストラテジー

鐐之助の場合，7歳を超えても暫くは，前論文で述べたような心理的統制法が効果をもっていた。例えば，お

じいさがいるから恥ずかしくて書物が読めないと言い訳する鐐之助に対して，平太夫が，「そんなことではよそへ読みに行くことはできぬ。読まれざ読まんで置くがゑゝ。凧も恥ずかしくて揚げられまへから，張らんで置くにしよう。」というと，鐐之助もそれには困り，こたつからでて書物を読んだ<桑，天15．1.18>。しかし，それから2か月もしないうちに，「口が達者になった」，「憎まれ口をたたく」，「いうことを聞かぬ」という意味の記述語がよく出てくるようになる。平太夫はその原因を丸山へ手習いに行くようになったことに求めている。そして，ずぶとく不従順な鐐之助をもて余し気味となり，7歳から8歳台にかけては体罰をかなり頻発するようになった。それは，裸にして追い出す，頭を叩く，尻をつねったり叩いたりするなどで平太夫もするがおばばの方がよくした。それには，鐐之助がおばばのいうこと（とくに行動の制限）を無視することが多く，おばばがこらえかねたことも関係している。

このような体罰に対しては，他家の人がとりなすことが多かった。また罰せられても，鐐之助は寝るときには平太夫にしがみついたし，また，罰の後でもしょぼしょぼしない鐐之助を，祖父母に対する信頼を失っていないものとおばばは受けとめていた<桑，天15．9．6；12．12>。また，白砂糖の入った容器を，「これは七色唐がらしで，鐐の食べられるものでなへ」と平太夫がいうと，敢えて疑わない鐐之助のことを，「……子どもは正直なものじゃ」と後でおばばは笑った<桑，天15．5.13>。このように，従来の行動統制法では効果が低下してきたので，平太夫たちが体罰によることも多くなった。しかし，かれらの鐐之助に対する態度が両価的（ambivalent）になったのではなく，基本的には受容的であった。なお罰の効果については，平太夫も，「鐐之助……いうことを聞かぬには困り入る。叱ってもおどしても痛い目に合わせて恐ろしいと思はず。太っ腹には何とも致し方なし。」と匙を投げ気味である<桑，弘 2．5．6>。従来いちばん効き目のあった方法，すなわち，「越後からな，鐐がいうこと聞かずば……」といい出そうとすると，鐐之助は「ジャジャ，ブシャブシャブシャ，レロレロレロ，ヤイヤイ」などと大声をだして聞かぬ振りをする<桑，弘 2.10.16>。

鐐之助が9歳になる前後から，それまでのように「あくれつく」状態がなくなってくる。「きょう明日はかっぱに引き込まれる日だ」という平太夫のもっともらしい話しにだまされて，水浴びに行くのを諦めたり<桑，弘 3．5.27>，来春はいよいよ柏崎から迎えにくるという作り話をまともに信じたり<桑，弘 4.10.16；5．1.20>ということが多くなってきて，体罰の記載もほとんど消えてしまう。鐐之助に対する平太夫の態度もやさしくなり，親戚の老人からも「鐐之助去年よりたいそうおとなしくなり，大きくもなりました。」とほめられるほどになった<桑，嘉 1．2.16>。それは平太夫最晩年のことであった。

この時期の柏崎日記には，行動統制はあまり大きな問題として取り上げられていない。おろく［5：0］が無理をいってだだをこねるので，叔母さに手伝ってもらって灸をすえたら，目立っておとなしくなったとか，真吾［3：6］がわんぱくになり，憎まれ口をたたき，何をいってもおどしても口ごたえなどして，手にも足にもおえないようになったというような記述が散見される程度である。全般に真吾は文句をいったり無理な要求をしない子どもだと，親や周囲の人々によって好意的に受けとめられている。ただ，「子どもおきくを何とも思わず，馬鹿に致し困り入り候。」<柏，弘 4．6．2>とある。これには子どもの年齢だけでなく，行三郎を生んだ後のおきくが，母親・主婦らしい役割が果たせず，勝之助からも，ややわがままな「困った病人」とみなされていることも関係しているかも知れない。そのおきくが真吾のおもちゃ箱の蓋を踏み破ったとき，真吾は大怒りした。おきくに頭を1つ叩かれた真吾はごね出して，なかなかおさまらない。それを聞きつけた運八郎がやってきてなだめて，漸く真吾は機嫌を直したのである<柏，弘 4.12.30>。

18）役割参加

鐐之助，おろく，それに真吾の3人について，家庭を中心とした場で，どのような役割を果たしていたかをかんたんにまとめる。まず，鐐之助が家庭や地域社会の運営に関して，本当に必要とされ，欠くことのできない役割を果たしていたという面はほとんどない。かれが7歳台のときから平太夫の肩などをたたくことはあったし，また8歳近くになってからは，ぼた餅の配り手，酒屋や医者などへの使い，法事などへの名代としての出席，雨戸を開けたり雪を掃いたりといった家のかんたんな仕事，それに餅つきのような家の行事への参加などをときたまやっている。しかしまだ，これという決まった役割を一貫して果たしているわけではない。むしろ，これらのいくつかは，珍しいこととして記載されていて，鐐之助が日常的に果たすように家族から期待されている家庭運営上の役割ではない。また鐐之助は，丸山では交代で当番を務めたが，それも本質的に必要な役割ではなかった。

次に，経済的側面から見ると，鐐之助が獲ってくる魚が食用として役立ったことはすでに述べた（項目8）。鐐之助が自分ですくってきたもろこやはやの腹わたを出して串に差したのは，9歳過ぎのことであった。また，かれは9歳5か月のときから，仲間に倣って小遣い銭稼

ぎのための網すきを始めている。仲間の家や自分の家に子ども同士で集まって魚網をすくのである。これは下級武士やその家族がよくしていたことで，平太夫やおばばたちも家でときどきやっていた。

しかし平太夫は，鐐之助がそれをすることには不賛成であった。網などは決してすくには及ばぬから，手習いと書物を精出して習えと平太夫はいう。けれども鐐之助は，「皆子供がすくゆえ，おれもすきたくてならぬ。焔硝買うのにするから，すかせてくんなへ。」と頼む。仲間が皆しているから，どのようにだめだといっても聞かないだろう。無理に叱ってやめさせてもかえって手習いもろくにしなくなるだろう……と平太夫は考えて譲ったのである<桑，弘 3．5.22>。そして，網すきをしなくてよいから書物に精出せと平太夫がいっても，鐐之助にみなが読んでいないから1人ではいやだといわれると，「皆子供同士網すく故，よしにしろとも言われず，困ったもの也。」というように，平太夫は鐐之助の仲間関係を優先させている<桑，弘 3．閏5.16>。

以上のように，釣りや網すきは，結果としては僅かの経済的意味をもったにしても，それは，趣味・遊びと仲間関係を専ら志向したものであった。家族の中での自分の位置づけに関しても，鐐之助はまだ明確な意識をもつに至ってはいなかった。鐐之助が7歳台のときであるが，おばばが叔母（おなか）も今年はどうしても嫁にやらねばならないし，鐐に嫁を取るまでにはまだ10年余りもあるので自分も骨が折れるといったことがある。鐐之助は暫く考えていたが，「おれが嫁取ると，おばばに楽させて上げるから案じなんな。しかし，嫁と2人では淋しかろふて。」といった。おばばが，「おばばもおじいさもいるがや。」というと，鐐之助が，「それなら淋しくないからゑゝ。」といったのでみな大笑いした<桑，天 15．4．5>。

それに対して，おろくは女の子である上に，家庭の実際上の必要性もかなり強かったことも関係して，家庭内での役割を果たすことがずっと多かった。まず，5歳3か月ころから，燃料運びや障子はがしといった臨時的な作業をおろくは手伝い始めている。そして，真吾の子守を辞めさせるとすぐに，おろく［5：10］が真吾［2：10］をおぶって遊びに出るようになった。そのときおろくはもう大分負い慣れていて，自分で真吾をおぶい紐で負えるようになっていた。道のよいときは真吾を歩かせて行くが，おろく自身おぶって歩くことが面白かったようである<柏，弘 2．2.24>。それからは，真吾を連れてかなり遠くまで使いに行って先方を驚かせたり，草団子に入れるための草摘みをしたり，おりんが生まれてからはその子守をしたりして，徐々に役割を果たすようになって行った。

そして6歳の後半頃からは，おろくのすることが家庭の運営に実質的な寄与をする程度にまでなった。彼女がした多様な仕事には，子守・乳貰い，後片付け，拭き掃除，お使い，留守番，草摘み・茸狩りや野菜の収獲，親の名代としての出席，給仕などが含まれている。おろくはあまりいやがることなく，これらの役割を果たしていた。おろくが病気などで子守をしないときは，勝之助たちはすぐに困ることになった。そして，おろくは7歳9か月頃から糸ひきがしたいから綿を買ってくれとねだるようになり，ついに200文分の綿を買ってもらった。そして糸引きに熱中したおろくは1週間のうちにかなりの上達を示したのである<柏，弘 4．2.11>。この頃には，朝と昼の後片付けを，おろくがまかされることも出てきていた。

最後に真吾に関していうと，社交的で客好きなかれは，来客の給仕をすることに興味をもった。そこで，4歳6か月頃から家で給仕をするようになり，後に竹内家で客を招いたときに，真吾［5：5］が頼まれて給仕を務めたこともあった<柏，弘 4．9.27>。かれに関しては，手伝いをときどきすることを除くと，決まった役割はまだ給仕だけである。しかし，客のあるときなどは夜遅くまで起きて給仕をしており，徐々にそれは実際的に役立つものになって行ったものと考えられる。

4．社会的・文化的環境：1839－48年

このセクションでは，すでに前論文で述べておいたように，これまで扱ってきた子どもの発達と子どもを直接に含む環境との相互調整的変化のもう1つ外側にあって，それらと結びつきをもつ環境要因について検討する。この要因も決して無変化ではないが，前者の2要因と比べると遥に安定性が高いので，桑柏日記がカヴァーする時期全体に関してまとめて述べるものである。

ここで取り上げる社会的・文化的環境の要因は，あくまで桑柏日記の中に現れており，しかも渡部家の家族生活とその子どもたちの発達と結びつくと考えられるものに限る。したがってそれは，要因全部を尽くしたものではない。また，日記に記載されている範囲を越えて，他の資料から情報を得ることもしない。まず，前論文で述べた exosystem に主として関する要因を取り上げ，次に macrosystem に関する側面を扱う。しかし，後者が原図または設計図として働いて前者のシステムが生じるのであるから，前者について論じるときには当然後者が絡んでくる。また逆に，後者の存在は前者を通して推測されるものである。したがって両者を明確に区別して要因を分類することは困難である。ここでのやり方

として，原図としてのイデオロギーあるいは情報のシステムの存在がかなり明確であるときにのみ，macro-system の水準で論じることにする。

1）Exosystem

ここでは，渡部家の子どもたちの生活と発達に直接・間接に結びつく外部要因のうちの代表的なもの４つを，比較的遠いものから近いものへと順に取り上げて行く。なお，かれらが利用できた医療のシステムについては，ある程度３の項目６で扱ったので，ここでは省略する。

コミュニケーションのシステム　２つの土地に分かれ住んだ渡部家の人々の間の関係を mesosystem と規定することは前論文で述べた通りである。例えば，長い間顔を合わせていない，あるいはこれまでに顔を合わせたことのない勝之助－鐐之助，おきく－鐐之助，鐐之助－おろく，それに鐐之助－真吾の関係は，まさに場面間のコミュニケーションと場面間の知識によって形成・維持・発展させられたものである。本論文でも例示したように，真吾にとって，まだ見ぬ兄が心理的に現実的な存在になり得たのは，平太夫の記録がもたらす情報を家族を通して取り入れ，またそれに対して家族が反応した結果である。また平太夫たちが，真吾の病気やおきくの病状について憂いたり，あるいは柏崎での子どもたちの成長を喜んだりして，勝之助一家と喜び・悲しみ・不安などの感情を共有できたのも，勝之助たちから送り出された情報があったからである。そのような関係の成立を可能にしたのが，２つの土地の間のコミュニケーションのシステムという外部要因だったのである。

両渡部家の間の日記と書状，それに軽量の荷物は，江戸の藩邸をキー・ステーションとする公的コミュニケーション・ルート（主として，宿継ぎ便）に便乗することと，桑名と柏崎の間での藩関係者の移動を利用して託送するという２つの方法が中心となっていた。後者の場合には10日から２，３週間で到着することもあるが，前者を利用した場合の所要日数は不安定で，４か月もかかることがあった。平太夫と勝之助は機会があるごとにそれを利用してコミュニケーションを図っていたのである。そして両者の間では，食料品，菓子，衣類，履き物，玩具，絵草紙，それに土産品といった，多様のものがやりとりされたのである。

このように，頻度と所要日数は別にしても，信頼できるコミュニケーションと軽量の物品輸送のシステムが，たいした負担を必要とせずに確保されていることは，両渡部家の生活とそこでの子どもたちの発達に，プラスの影響を及ぼしたと考えられる。そもそも，そのようなシステムの裏づけがなければ，桑柏日記が成立することもなかったであろう。そして，この日記の特徴である双方向での時差を伴った系列的コミュニケーションは，途中でメッセージが失われたり，余りにもフィードバックが遅れたりすると動機づけが低下する可能性があり，かれらが当時利用できたシステムの発達の程度が窺える。その他に，前論文でも述べたように，両地の間を移動する知人が家族の消息を伝えたことや，とくに依頼されて子どもの顔貌やパーソナリティ特徴のように文字では伝えにくい情報をもたらしたことも，上記のシステムを補完する役割を果たした。

ところで，平太夫と勝之助には，いくつかの経路によって遠方の土地での出来事に関する情報が入ってきていた。例えば，江戸の火事，奥州や京都での水害，善光寺の地震，名古屋でのお札騒ぎなどに加えて，琉球，長崎，薩摩，三河，遠州，房総，江戸から松前に至る各地での異国船・黒船に関する情報が，相当詳細にしかも早く伝わっている。異国船については，航行する船体を見たという情報，日本の千石船と接触した話，そしてBiddle の来航（1846年）の情報にまでわたっている。これらの情報は，公式のルートを流れたものもあるが，飛脚の話や個人的な手紙によるインフォーマルなものの方が多く，当時のわが国の情報への高い要求度とその伝わり方のよさの一端がそこにも反映されている。異国船に関する情報と流言は，勝之助の勤務とも関係しただけでなく，おきくや鐐之助に現実的な不安を抱かせすらしたのである<桑，天15．9.17；柏，弘３．6.20>。

幕府と藩による行動規制　人々の日常生活に関する幕府や桑名藩の政策とその実施のやり方は，渡部家の人々の生活にも影響する。老中水野忠邦が贅沢を禁止し倹約を勧めるために生活の細部にわたって規制を加えたことは，おきくの帯，子どもの刷りもの，桑名と柏崎での祭りや盆踊りの着物などに対して実際に影響を与えている。その影響は天保12年５月からの幕府による天保改革以前にすでに出ている。事実，その前年にすでに厳しいお触れがあって，陣屋内の女はみな紬の帯を締めるようになったが，おきくはそれをもっていないのでどこへも出られなくなってしまった。そこで仕方なしに手持ちの帯を売り，それに２朱を足して紬の帯をつくったのであるが，御倹約でかえって当面の支出が増えてしまって困ったのである<柏，天12．4.18>。

「倹約」に対する民衆の反発は種々の風刺に反映されたが，おろく［３：８］も意味も分からずに風刺の唄を歌った：「いかに御倹約だとふて紙子のよもじノウ，ぬれてやぶけておかんちょが見ゆるノウ」<柏，天14．1.4>。ついでながら，忠邦がいったん罷免されたその年の９月に勝之助は江戸に出張中であり，水野屋敷前での騒動について記している<柏，天14．閏 9.13-14>。そ

して弘化2年には，桑名や四日市の祭りの規制も緩んで以前に復し，柏崎の盆踊りの装束・鳴物の制限も弘化3年には殆どなくなったことが，両日記からもわかる。

次に，前論文でも述べた穏便触れは，日常生活と子どもの活動に直接の制限を加えるものであった。それは藩主とその関係者だけでなく，将軍家や尾張徳川家などの場合にも適用されたのでかなり頻繁に起こったが，日数はさまざまであった。穏便期間中の子どもの遊び・活動の制限はかなりきっちりと強制され，子どもたちもそれに従った。例えば，穏便のときに弓を持ち出して鳥を射ようとする鐐之助に平太夫はいった：「穏便に其様な事する所を御下横目に見付けられると大変だ。……下手にするととらへられて牢へ入れられる。」それで漸く鐐之助は思いとどまったのである<桑，弘 1.11.23>。

しかし，穏便が日常生活に大きな支障を与えそうなときには，人々の対応は巧みであった。すなわち，近く穏便触れが出そうだという噂がまず流れてきて，予め対処してしまうのである。例えば，家中，町方ともに餅つきなどを急いで済ませてしまい，その後で触れを聞いたのである<桑，弘 4.12.20－27>。それで正月の準備にも困らず，かつ穏便も遵守されることになる。

藩や陣屋の規則の執行にあたっても，定められたことの遵守と抜け道とが共存した。例えば桑名にしても柏崎陣屋にしても，定められた時刻に門を閉め，それ以後に当番は一存で人を出入りさせないことは厳重に守られた。それを怠ったものが厳しい処分を受けたことは桑名でも柏崎でも起こっている。しかし，その時刻を告げるのには融通がきく面もあった。公式に時を打たなければ，まだその時刻にはなっていないとみなして，内部のものが苦境に立つのを防ぐのである。実際に，勝之助を含めた何人かの帰陣が外で馳走になっていて遅れたときにそのようなことがあった。逆に，明るくなったのですでに六ツ（6時）を過ぎたと判断した門の当番が藩士の下女を通した後で，夜廻りが遅れて拍子木を打ったときには，当番の方が処分を受けることになる<柏，嘉 1. 2.11>。このように建て前に引っ掛かるときには厳密に問題が処理されるが，門の管理の運用も柏崎ではかなり融通がきいたようである。住み込みでない手伝い人に泊まってもらう必要があったときや，町からの訪問者が定刻に門を出られなかったときに，内々に家に人を泊めることを勝之助はしていたのである。

職場の規律　前論文でも触れたように，陣屋の勤務にかかわる規律には緩いところがあり，それは勝之助一家の子育てにとっては都合のよいものであった。すでに述べたように，勝之助の宿直（それも必要によって，同僚と交渉して日を代わり合うことはかんたんであった）のときに，おろくや真吾が泊まりにきていた。子どもはそこで父親と弁当を食べ，その日の話をしたり，父親に昔話をしてもらったりしながら寝るのである。真吾の場合には，翌朝にこたつにあたり手水を使った頃に，おろくが（行三郎を背負って）迎えにきて，少しの時間を過ごしてから父親よりは一足先に帰るというのが，典型的なパターンであった。

勝之助の子どもたちは，役所に遊びに行って草摘みをしたり弓を射たりするだけではなく，勤務時間中の父親に月代を剃ってもらう，工作をしてもらう，あるいは書物を教えてもらう，朝一緒に出勤して暫く守りをしてもらうなどをしている。鐐之助もたまには平太夫の職場に遊びに行ったが，柏崎ほどではない。この違いには，子どもの年齢，住居と職場の距離，そして，桑名と柏崎の職場の規律などの差が関係しているであろう。もし，狭い陣屋の中での職住近接した状況でなければ，そして，実質において緩い職場の規律がなければ，渡部家の家庭運営と子育てには困難をきたしたであろう。

ところで，勝之助も自分の紙子の材料を役所で作ったことがあった。その頃のかれが仕事をしていた部屋は2階にあって，どこからも見えないのでそれをしたのだと，勝之助は正直に書いている<柏，嘉 1. 3.17>。次の項でも述べるように，陣屋勤務の藩士の間には，それほど大きな身分の差がなかった。それに，桑名，江戸から遠く離れた小人数の陣屋勤務には気楽なところもあったのであろう。これらの条件が緩い職場の規律を生み，人手が足りなくて困っていた渡部家の家族生活にはプラスとなったのである。

社会的関係のシステム　渡部家の人々が結んだ対人的・社会的な関係の元に，どのような社会のシステムが働いていたのであろうか。まず，当時の人々の家族外の日常的な社会的相互作用には，親戚間で生起するものが大きな比重を占めていたと思われる。桑名日記に日常的に登場する人物の中で，渡部家との親戚関係のはっきりしない人々がかなりいる。しかし，平太夫と勝之助の実家である片山家，おきくの実家であり平太夫の娘の1人が嫁いだと考えられる佐藤家，平太夫の嫁いだ娘たち，そしてそれらよりはずっと接触の程度は少ないが増の実家の松本家までを加えると，おとなの生活にとっても，また鐐之助の日常生活にとっても，その比重の大きさは驚くべきものである。

それは，日常的な行き来だけではなく，子どもの成長過程でのいくつもの儀礼，結婚や出産，新築，加増を始めとした諸々の慶事を祝ったり喜びの気持ちを伝えること；病気，死亡，離婚，火事，藩からの処分を初めとしたいろいろの出来事への見舞い；そして，法事への出席

といった多様な場合があった。鐐之助もその成長過程の中で，日常的接触の他に，これらの人々から祝ってもらったり見舞ってもらったりしている。また，かれは親戚や近親者の婚礼，葬儀，それに法事などに何回も参加する機会をもった。このように，親戚を中心として社会的関係が結ばれて行くというシステムは，それがいざというときの支援システムとしても働くことを意味しており，それが人々の生活に対してもった意味は見逃せない。

それに対して，柏崎での勝之助一家は，おきくの遠縁にあたる竹内家を除くと，そのような親戚関係のネットワークをもっていなかった。そこで，竹内家に対する依存が高まるほかに，陣屋の同僚たちの家族や町方の人々との関係が深まらざるを得なくなる。実際に，3の項目14でも述べたように，本来は雇われ人であったおゆきやお弓の家族と勝之助一家との関係は，一種の親戚づきあいの要素をすら含むようになったとに思われる。

ここまでは，接近・接触の側面を述べたが，次に分離の側面にも触れておく。桑名の鐐之助の場合，日常的に接するおとなも仲間も，大部分は渡部家が属する舞台格のものであったと思われる。鐐之助が町方の子どもと個人的な接触を多くもったようには思えない。また，書院格の武士の子弟との個人的関係も日記の中には見当たらない。むしろ，近隣の舞台格の家の仲間とともに行動する中で，対立とまではいえないにしても相互に疎隔された関係を暗示するような記述と，平太夫が，「書院格の……」というように，やはり自分たちと区別した記述が，桑名日記の中に散見されるのである。

それに対して柏崎陣屋は，御勘定頭もしくは勤番で来る郡代を除くと，受ける禄も大きくは違わないものによって構成されているので，武士階級内部での分離は，おとなでも子どもでもはっきりしていなかったように思われる。もしかすると，3の項目11で述べた柏崎の学校での高い学習達成度の背景をなす1要因として，それが関係していたのかも知れない。そしてすでに述べたように，渡部家は町方のものとの行き来をもっていた。子どもたちだけではなく，勝之助自身がおゆきやお弓の家に立ち寄ることも稀ではなかった。ついでながら，柏崎でも桑名でも百姓から嫁をもらった例が述べられている<桑，弘2.10.16>。

最後に年齢と性別による社会的類別の問題を取り上げておく。親戚のつきあいが中心をなす桑名の渡部家の日記からそれを読みとることは困難で，「若手」というグルーピングが見られるのが目立つ程度である。それに対して，全般的にいって親戚関係の働きが弱い柏崎陣屋では，「女客」，「男の客」，「子ども客」，「おばあさんの茶」，「年寄りの茶」，「娘の茶」，「子どもの寄り合い」を初めとした飲食・会合が盛んであった。これは，祭りや儀礼のときに明らかになる子ども組と若者組の存在や，年齢階梯を表わすいくつかのことばの使用とともに，人々が性別や年齢によって幾つものやり方で分類されるようすを窺わせるものである。これらすべてが，陣屋独自のものか，柏崎の地域的背景と関係あるのかどうかは今の筆者には分からない。なお，これらの「客」は，「同役振る舞い」とともに多額の支出を伴うものであり，勝之助を深く悩ませたのであった。

2）Macrosystem

ここでは子どもの取り扱いと家族生活に直接に関係するイデオロギーと情報のシステムのうち，2つだけを論じることにする。

子どもに対するメンタリティと態度　これはある程度前論文の繰り返しになるが，桑柏日記に反映されている渡部家の子どもたちを取り巻く家族，親戚，そして周囲の人々の行動に反映されているものから推測するならば，当時の人々の子どものとらえ方とそれに対する構えとは，きわめて nurturant（養護的）だと規定せざるを得ない。それはまた，子どもの病気・怪我などの苦しみや心理的不安にどのような対処をするか，子どもに何を許容するか，子どもにどのような楽しみの機会を提供するかといった，社会が用意している子どもの処遇のための諸々のレパートリーにも表現されているものである。そしてその構えは，子どもをおとなの生活から切り離すことによってではなく，多くの側面の経験を共有することを通して実現されたのである。

幼い子どもに「虫気」のないことは幸いとされた。いわゆるカンの強い神経質な子どもは，少しの刺激にも触発されて泣き出して，しかもそれがなかなか治まらない。このような気質の持ち主は養育者を悩ますものであるので，それがない子どもは歓迎されたのである。次に，元気で食欲があって発育のよい子ども（とくに男の子の場合）は，「気味のよい奴」としてプラスに評価された。活動的な「わやく太郎」も歓迎されている。しかし，虫気のある子どもの場合には，そのことを認識して対処しようとした。また，最初から「がせのない」（生命力が弱く元気のない）子どもは，それだけに可哀そうな存在と受けとめられたのである。

人々は発達して行く子どもの特徴的な変化に関心を向け，共感を示すとともにその変化過程に参与しようとする。そして，子どもに楽しませる機会を与えるために自分の生活を調節し，子どもの喜びをわが喜びと感じるような「子ども中心主義」の構えをとっている。とくに幼い子どもに対する許容性は，今日であれば「溺愛的」と判定するであろう程度にまで達している。そして幼い子

どもと間に心理的な絆を形成した家族以外の人も，当の子どもだけでなくその親にも共感を示し，感情の交流が可能となる。もちろん，子どもに対する厳しい扱いや無関心な側面があったことも否定できない。また，おとなと子どもの生活経験の共有が，常に子どもにとって有益なものであったともいい切れないであろう。さらに前論文でも述べたような資料の代表性の問題は残っている。しかし，上記のような子どもに対する社会の養護的な構えの存在を仮定し，しかもそれが社会の諸システムの原図として果たしたプラスの側面に注目する意味は大きいと筆者は信じる。

子どもの発達に関する信念・価値　上記の養護的な構えと相互規定的に発展し位置づいた解釈のスキームと価値を一言で表現すれば，自律的存在としての児童発達観と，社会性（sociability，社会と結びつく性質）の強調である。子どもは一方において，外的な影響力によって完全に直接的な制御をすることはできない存在であるとみなされるとともに，その子どもを社会と結びつく方向に導いて行くべきだとする目標が立てられる。このような子どもの本性のとらえ方と目標設定とが，社会の原図の水準で共有されており，社会のおとなはそれを基本的見取り図として使用しながら，自分が接する個々の子どもへの対応方法を構成して行ったものと考えられる。

そしてそれは前論文と本論文の３の項目13と17で述べたように，子どもの中で形成されつつある自己像あるいは自己概念に注目しつつ，それに働きかけることを通して，子どもの行動を一定の方向に導こうとするストラテジーとして現れる。子どもの自己を媒介にして，子どもによる自己制御を可能にするような方向での働きかけが有効であるというよりは，むしろそれしか最終的に有効な方法はないとかれらは信じていたかのようである。思うように変化してくれない子どもの行動に，「なんとも致し方なし」として困ってはいても，やはりよくとられるのは，子どもの自己に訴えかける心理的統制法であった。

それとともに，子どもがごく幼いときから，その行動能力の発現や個人差の出現を，大きくいって対人的に方向づけられ社会と結びついて行く傾向の現れととらえ評価していることは，項目９，10で述べた通りである。そしてそれは項目16で述べたように，年長の子どもが仲間と結びついていることを重視する態度につながって行く。養育者は子どもを，幼いときから人と結びつきを形成して行く存在ととらえ，子どもを取り巻く人々と子どもとの結びつきを強めるような手だてを生活の中に組み込んでいた。そして社交的でおとなに可愛がられること，年上の子どもにうまく遊びに入れてもらえること，さらに子どもがある程度成長してからは，近隣の仲間とよい関係をもっていることを価値あることと評価していたと考えられる。

討　論

前論文と本論文において，桑柏日記の２人の筆者が，家族生活と子どもの発達に関する領域について，何に関心をもって記述したかということと，そこからわれわれが何を読み取れるかについて分析してきた。もちろん，それは情報を取捨選択し処理した今回の筆者（小嶋）の影響を前提としたものであることは，前論文でも述べた通りである。ここでは，２つの論文の「分析の結果」の部分でまとめ，論じた点は繰り返さないで，発達研究者の視点から見て興味をもった問題のうち，一般的な水準で討論できる３つの点に絞って以下にかんたんに述べておく。

支援体制と社会的関係　幼い子どもを抱え，経済的制約によって常に最低限の人手で家庭運営をしていた勝之助一家にとっては，通常の日常生活においてもそうであるが，家族の病気，なかでも主婦のそれは，直ちに家庭生活に大きな障害をもたらした。そのときにまず第１に主婦の役割を分担し支援したのは，夫の勝之助であった。もともと，通常のときでも子どもの世話と家まわりの仕事に関してかなりの役割を果たしていたかれであるが，妻がその役割を果たせず，また手伝いも得られないときには，せわしくて困ると日記でこぼしながらも，朝夕忙しく立ち働いた。それはどうしても必要な働きであり，また勝之助にはそれをやり遂げるだけの技能のレパートリーが備わっていたのである。ある程度の融通がきいた，しかも職住近接の陣屋勤務であることもかれらに幸いしたことはすでに述べた通りである。そして，おろくが年長になってからは，子守や家事の一部を分担したことも寄与した。

しかし，勝之助やおろくの働きだけでは家庭運営のすべての課題をこなせないのはいうまでもない。とくに，頻繁に宿直があった上に，数日間から１か月にも及ぶ出張があった勝之助の勤務条件から考えると，家族外からの支援なしには家庭の運営はできない。それは通常は何軒もの親戚のネットワークから得られるものであるが，勝之助一家に対しては竹内家の人々がそれを一手に引き受けてくれたのであった。それに同僚の妻・母親も，いざというときに勝之助一家を支えてくれた。このような支援体制が陣屋という小さい社会組織の中で機能していたことは，勝之助一家にとって大きな意味をもった。それなくしては勝之助一家の家族生活もその子どもたちの発達も，ほとんど考えることはできないくらいである。

それに加えて，勝之助一家はつぎつぎと子守・手伝いを雇った。そのうちの2，3人は後までも勝之助一家と結びつきをもち，雇われていた期間よりもそれから後の期間における方が，むしろ勝之助一家に対する支援の効果が大きいほどであった。

桑名の平太夫一家の場合には，勝之助一家ほど頻繁に緊急の援助を必要とすることはなかった。しかしすでに述べたように，鐐之助の生育過程やおなかの出産・育児の過程，さらに家族の病気のときなどには親戚を中心とした多くの人々からかれらは援助を受け，また，逆に援助もしていたのである。それは，物心両面にわたる相互援助であった。

さて，ここで考慮に入れる必要があるのは，支援体制と社会的関係の問題である。筆者の見解によれば，いざというときに支援体制が働くためには，日常的な社会的相互作用を通しての関係維持が欠かせないようである。すでに述べたように，相互援助はたんに人手やものの面だけではなく，相手を慰めたり励ましたり，また相手とともに喜んだり心配したりというような心理生活の側面にもわたったものである。そのような相互援助を可能にするためには，今日のわれわれだけではなくて，当時の平太夫や勝之助・おきくたちすら煩わしいと感じた日常ベースの儀礼化された，あるいは自発的なやりとりがある。それによって，相互の生活に関する情報を共有するだけでなく，その心理的生活をも共有するようになる。

このことは，勝之助一家ともとの子守の家族との関係を考えるとさらにはっきりする。その関係がたんなる雇用関係を越えた親戚づきあいに近いものにまで発展したことはすでに述べた通りである。そのような関係は，両方の家族の成員の間のパーソナルな関係の基礎がなくては形成されないであろう。そしてそれは，幼い子どもと子守の間に発展した相互的な愛着と，それをもとにした両方の家族間の往来によって形成されていった社会的関係であるといえる。ここで興味がもてるのは，子どもを可愛がる子守とそれに懐く子どもとの関係が，すべての初めにあることである。そのような関係ができない場合には子守や手伝いは早期のうちに解雇される。逆にうまく行くと，おきくがその子守を気に入り，両方の家族を含んだ関係が発展して行ったのである。勝之助一家と竹内家の間の関係の深まりにも，類似した機構が関与していたことはすでに述べておいた。このように，幼い子どもとの結びつきを通して，双方向的に外の集団の成員が内に導き入れられるということは，次の項目で述べるような，幼い子どもが家族システムの中で果たす役割の1つとしても，注目に価する。

有能性の低い家族成員が家族システムに及ぼす影響　この項で扱うことを抽象的な命題として述べると，家族成員間の社会的相互作用のパターンは，有能性の低い家族成員，とくにいちばん下の子の有能性の水準の関数として変化するということになる。勝之助一家に赤ん坊が生まれると，それをきっかけにして毎日の生活のパターン，親子間やきょうだい間の相互作用のパターン，共寝の仕方などが大きく変化することは，これまでにいくつかの項目の中で述べてきた通りである。また下の子の発達に伴って，それらもまた連動して変化して行くことも容易に理解できよう。家族内で最年少の子どもの身体的・心理的安寧を重視するのならば，その子の世話に対して時間とエネルギーを振り向けるのは当然であるし，その結果，それまで最年少の子どもの位置を占めていたものの扱いを含めて，家族システム全体が再調整されるのも当然のことである。

下から2番目となった子どもが経なければならない移行に本人と周囲のものがどのように対処したかは，鐐之助，おろく，そして真吾の場合についてすでに述べた。当該の子どもの心理的移行を理解する鍵の1つとして，本人の自己概念が絡んでいることは，おろくについてやや詳しく検討した。そしてまた，その過程と関係して興味深かったのは真吾の場合で，かれは最年少の子ども→兄→最年少の子ども→兄という家族内の位置の変化を経たのである。おりんの誕生によって兄となった真吾は，おりんの死後再び自分を「ネンネ」と規定し直したのであるが，それは，そのような結果をもたらすとは想像していなかった母親の「乳を吸ってほしい」という要請がきっかけになったのであった。

次に下の子に行動能力がついてくると，その子の世話に手を取られたりその子が手足まといになることが少なくなることによって，家族全体のエネルギーのより多くが，消費的あるいは生産的な側面に配分し直される。その結果，家庭生活に経済的にも心理的にもゆとりが出てくる。勝之助の日記には，そのような変化がかなり敏感に反映されている。ただし，下の子に行動能力がつくということは，上の子との間のもめごとが増すことでもある。そしてすでに述べたように，下の方の認知能力の発達と社会的相互作用の経験を通して，その子が「姉（または兄）と同じ自分」というカテゴリー化をすることが，本人と上の子どもの両方の発達に結びついたのである。このように，子どもが家族の中で自己をどのように規定して行動するかが，本人と家族の発達的変化を理解する重要な手がかりとなる。

以上のような考察に，前項の最後で述べたことも含めて考えると，一般には幼い子ども，なかでも最年少の子どもによる家族生活への影響，あるいはもっと積極的に

いって寄与は相当大きいものといわざるを得ない。

個体と環境の相互作用を通した社会的参加と自己制御の発達　対人的結びつきを通して社会に方向づけられることと，周囲のものが望むような形で自分を制御することができるようになることは，子どもの発達の重要な目標であった。子どもとそれを取り巻く環境とが，どのように相互調整的に関係をもちながら変化して，子どもは徐々に発達の目標に近づくのであろうか。その初期の過程について仮説的に述べて見よう。

子どもは，ひとりで坐れるようになる二十数週頃から，もて遊び（玩具）やきせるのような道具を与えておかれて，それを操作する経験を積んで行く。それと並んで，子どもは自分の周囲のものがいろいろの対象を扱っているのを観察する過程を重ねて行く。そして，だんだん周囲のものがしているのに似た対象の扱い方を身につけて行く。そして，1歳台に入ると，本論文（3の項目10）でも述べたように，きせるや茶わんを相手の口の所にもって行くような行動を示す。これは，相手に対する社会的な意図をもった行動というよりは，「きせるは口に」あるいは「茶わんは口に」というような，ある対象と別の対象とが結びつくのだという知的理解の反映であろう。

しかし，このような本質的には社会的とはいえない行動の中に，すでに2重の意味で社会的なものが関与している。まず，きせるを口にもって行くのは明らかに社会におけるその扱い方を取り入れたものであるが，もう1つ考えるべきことがある。それは，「きせるは口に」ということにこだわる真吾の中に，たんなる知的理解を越えた何かが働いていると考えられ，それが，相互につきものである2つの対象を一貫してくっつけておこうとするように真吾を導いたのである。それは自分の外にある規範の気づきと考えられ，その起源の一端は社会にある。しかしこの段階では，周囲のものの期待に応じて特定の行動をするという側面はないであろう。

次に起こるのは，2歳台のおろくが父親の世話をしようとしたように，より社会的な行動である。これは，相手が今何をしようとしているのかを状況から判断して，相手をアシストしようとする行動である。それには相手の意図の理解が関与しており，しかも自分のためにするのではなく，自分が参与して相手の目標の達成にかかわろうとするのである。このような行動を子どもが示すと，例えば茶やたばこの世話をするおろく［2：4］について勝之助が「猫にはましにあいなり候」<柏，天12．8．7>と記したように，おとなは子どもの行動に対応した反応を示すことによって子どもの行動を強化する。そのようなおとなの反応によって，子どもは社会的相互作用の中に組み込まれて行く。しかしこの状況下ではまだ，子どもは自分の行動に対する社会的期待を明確に意識しているとはいえないであろう。

子どもがそのような社会的期待を知るのは，おそらく自分の習慣的行動や興味と対立するものとしてのそれであろう。前論文（pp.21-22）で述べたように，子どもの現在の行動や状態を変容させようと周囲のものが働きかける。それはすでに述べたように，周囲のものに働きかけられても「いうことも，することもしない」段階→「いうけれども，しない／できない」段階→「ちゃんとする」段階という移行を示すと考えられる。その過程で重要な意味をもつのは，社会化の担い手が与える言語的示唆が，子どもの自己概念と相互作用をして，後者が徐々に変化して行くと考えられる点である。それによって，子どもの外にあった行動基準がだんだんと内面化して，自己制御が可能になって行くのであろう。そこでは周囲のものが子どもの自己に働きかけるとともに，子ども自身が自己と対話しながら，行動変容のイニシアティブを取るという，自己を媒介とした過程が重要な意味をもつ。その際におとなが働きかけるタイミングは，何によって決まるのであろうか。それはまず，子どもの行動発達であり，その状態を見ながらおとなは働きかける。そしてそれが社会の基準から大幅に遅れたときに，その基準が社会化の担い手にプロンプトを送るのではないか。ここにも，個体とその環境の相互作用が認められるのである。

エピローグ

前論文でも述べたように，桑名の3人（平太夫・増・鐐之助）と，柏崎に分かれ住むこととなった勝之助・おきく・おろくとそこで生を享けた3人の子ども（真吾，おりん，行三郎）とは，天保10年5月30日以来，両日記がつけられている期間中，一度も顔を合わすことはなかった。この期間中に平太夫が移動したのは，せいぜい多度（現在，三重県）までであった。他方，勝之助は江戸や善光寺・松代まで公務で出張したことはある。しかし善光寺からでもなお，桑名とは旅程にして8日ほどの距離が残っていたのであった。

勝之助もおきくも，柏崎の勤務が一時的なものであると受けとめていたことは，柏崎日記の初めから終わりまで，何回も出てくる。例えば，柏崎在住も間もなく丸8年になろうというときに，次のような記述がある<柏，弘 4．4.29>。

真吾［5：0］は4月の節句の幟が近所に立てられているのを見てたいへん羨ましがり，どうして自分の所でも幟を立ててくれないのかといった。それに対して勝之助が桑名の家で立ててくださるからいいのだと答えると，

真吾は「兄チャ（鐐之助）はもふ大きいから，立てなんでもいへのに」といい，ほとほと欲しそうにみえる。そこでおきくが勝之助に，来年の御下横目の交代のときにでも幟を1本託してくださるよう，桑名に手紙を書いてくれという。竿を1本買って裏の庭に幟を立ててやりたいのだというので，勝之助は「馬鹿なこと。そのうちには帰るも知れぬ」と一喝する。

皮肉なことに，翌年に勤番になった御下横目とともに平太夫の死を知らせる便りが勝之助一家にもたらされたようである。それは平太夫の死から15日後のことであった。勝之助の日記は，昼食にとろろ汁を作りお隣の竹内運八郎もよんで食べたところで突如として切れている<柏，嘉 1．3.22>。午前の分を記録した後で，親戚か誰かからの状が届いたものと考えられる。

平太夫の死後，少なくとも勝之助は1回，桑名に戻ったものと思われる。しかし，嘉永元年4月28日に勝之助が家督を継ぐことが認められるが，勝之助・おきくが永年望んでいた桑名への帰任は実現しなかった。そのように手を回すことは，平太夫の存命中から，勝之助にはとても考えられないことであった。結局，その年の9月に増と鐐之助が柏崎へ移ることとなった。そこで，話にはよく聞いているがお互いに覚えているはずのない，あるいは初めて見ることになるきょうだい4人がともに暮らすことになった。しかし澤下・澤下（1984）も述べているように，平太夫の家に居候していた出戻りのおなかとその子のおすみのその後は不明のままである。平太夫の死の前から，かなり重い病気を患っていたおなかは，果たして回復したであろうか。そして，それから3年もたたないうちに，勝之助一家は行三郎を失うことになる。

鐐之助と増が合流することによって，勝之助一家の経済状態は，またまた苦しくなったであろう。それまで平太夫と勝之助で，実質的に合計19石6人扶持を受けていたのが，勝之助の分の9石3人扶持に減ったことになるからである。2年後に13歳の鐐之助（多助）は新郷足軽に召出され，2人扶持を受けるようになり，それから約5年たって3石をもらうようになるが，その後1年もしないうちに19歳の若さで死んでしまう。それに約2年先立って，第6子のおてつを生んだ翌日におきくが死亡していることは前論文でも触れた通りである。鐐之助が死亡した翌年，今度は真吾が新郷足軽に召出されて禄をもらい始める。そして後に，いったん片山姓を名乗ったこともあるかれが渡部家を嗣ぐことになる。

その後，渡部家の人々はおろくの結婚，真吾の結婚とその2日後の増の死，そして勝之助の死，さらにおろくの死をつぎつぎと迎えることになる。おろくが死んだ時点（慶応2年［1866］）で渡部家に残っていたのは，真吾（清介と改名していた）夫妻とその2人と子ども，それにおてつだけであった。柏崎にあって父勝之助と類似した道を歩んだ真吾（渡部を現在の渡邉と変えたのは真吾かも知れない）は，幸いにして桑名藩が経験した明治維新の変をくぐり抜け，臨月に近い妻と3人の子どもにおてつを伴い桑名に帰ったのである。

真吾は廃藩後の明治6年から同20年の学令改正まで桑名などの学校に勤務することとなる。そして明治11年までに5男5女の親となった。しかし柏崎で生まれた長男の第一郎を陸軍士官学校在学中に病気で失うという悲運に見舞われる（明治23年）。そこで，その前年末に長崎県対馬の厳原へ移り，そこで巡査をしていた次男（袖野姓）と24年に同じ場所で巡査を務めることとなった三男に続いて，真吾も厳原に移り役所勤務を始めた。翌25年には妻や残っていた3人の子どもたちも厳原に移り，日清戦争の後，次男と四男があい次いで台湾へ渡ってからも，真吾は同32年まで厳原の役所で勤めた。24，5年に，桑柏日記もいったん厳原に渡ったのではないかと考えられる。

このエピローグの基となった系図は，厳原での勤務を辞めた直後に真吾が書いたものである。かれは明治35年に妻と末娘とともに，桑柏日記をもって厳原を去ったものと考えられ，愛知県を経て明治36年に桑名に戻り，明治41年に死亡した。系図は渡邉家を嗣いだ四男源四郎からその子どもに伝えられ，第2次大戦後に台湾から持ち帰られて今日に至っている。なお渡邉家（鹿児島県志布志市）には，台湾に渡った子どもへの恋しさをうたった真吾晩年のうたが残されている。また，桑名と柏崎の渡邉家の墓は，真吾の次男の子ども（いわき市）の手によって，立派に修復・建立されている。さらに，勝之助の子どもの生育にとって重要な支援者であった竹内家の墓も，柏崎で子孫の手によって守られている。

筆者による桑柏日記との取り組みはまだ日も浅く，分からないことが山ほど残っている。筆者は，発達研究を基礎としたアマチュア歴史研究として，今後もこの類稀な日記との取り組みを続けて行くつもりである。前論文と本論文は，そのための大枠をなすものとして，とりあえず発表したものである。この論文が，発達研究者によるアマチュア的歴史研究の意味を他の領域の研究者に問うことと，歴史研究に対する心理学者の潜在的興味の掘り起こし（小嶋，1987）の一端を担うことを願っている。

今年の桑名市春日神社の石取祭も，各町挙げての取り組みの下で盛大に取り行われた。その太鼓と鉦のリズムと子どもから老人までの全世代の参加者が醸しだす独特の雰囲気の中にいて，筆者は2歳の，7歳の，そして10

歳の鐐之助の面影を求めている自分に気がついた。研究者としては危険な要素にもなりうるが，前論文に対するある心理学研究者の私的コメントにもあったように，筆者はすでに，渡部家の人々に深い共感と親愛の情以上のものを抱いているのかも知れない。

謝　辞

前論文で感謝の気持ちを表明した方々に加えて，渡部勝之助から3代後に当たられるご子孫の方々，とりわけ渡辺勇（志布志市）・袖野治子（いわき市）の両氏に心から感謝したい。活字化されたものとはいえ，本来私的な性格の日記を材料として，研究者としていろいろの分析を加えたため，ご子孫に気恥ずかしさや当惑の念を与えたことは否めない。それにもかかわらず，このお二人は筆者の研究の意義を認めてくださり，度重なる問い合わせに対しても，たいへん親切に調査し回答をくださったのである。このお二人を初めとしたご子孫の方々にこの論文を捧げたい。

文　　献

Bond, J. T., Filer, L. J., Jr., Leveille, G. A., Thomson, A. M., & Weil, W. B., Jr. (Eds.) 1981 *Infant and child feeding.* New York : Academic Press.

Fildes, V. 1986 *Breasts, bottles and babies : A history of infant feeding.* Edinburgh : Edinburgh University Press.

香月牛山　1703　小児必用養育草　山住正己・中江和恵（編注）子育ての書1　平凡社［1976］pp.287-366.

小嶋秀夫　1986　桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(1)　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**33**，1-24.

小嶋秀夫　1987　一発達研究者，幕末の家族交換日記を読む：桑名日記・柏崎日記（1839－1848年）　日本教育心理学会第29回総会発表論文集，156-157.

澤下春男　1987　桑名日記・柏崎日記の研究(1)――両日記にあらわれた米価等雑考――鈴鹿短期大学紀要，**7**，83-102.

渡部平太夫・渡部勝之助　1839－1848　澤下春男・澤下能親（校訂）　桑名日記・柏崎日記　全8巻　校訂者私家版　1984.［澤下春男　〒510 四日市市高花平3丁目1－36；℡（0593）21－0608］

（1987年7月31日　受稿）

ABSTRACT

CHILD DEVELOPMENT AND FAMILY LIFE APPEARING IN TWO SETS OF FAMILY DIARIES WRITTEN BY LOW-RANKING WARRIORS: *Kuwana Nikki* and *Kashiwazaki Nikki,* 1839 – 1848. II

Hideo Kojima

This article forms the second part of the analysis of child development and family life of the Watanabe family in early modern Japan. At Kuwana, the grandparents lived with their first grandson and their youngest daughter who later gave birth to a baby. The partents brought their second child to Kashiwazaki, and by 1847 had three more children there. The grandfather and the father kept diaries almost every day and exchanged them occasionally. The present article first analyzes children's development and their immediate environments appearing in the second half of the diaries, and socio-cultural environments that surrounded the Watanabes between the period of 1839 to 1848, then it concludes with discussion of a few points relevant to developmental perspectives.

Children's development and their immediate environments were analyzed with regard to eighteen aspects, which are characterized as follows. (1) A series of rituals related to child birth and development were celebrated by family members, relatives, and neighbors. (2) Timing of nursing the newborn varied between less than 24 hours after birth and two and a half days depending on the newborn's state. When the mother could not nurse her baby enough, supplementary nursing by neighbors and artificial feeding of starch soup with a small amount of sugar were used. Weaning was normally done when the next baby was born. (3) Toilet training began very early and ended in the first year or the second. (4) Very frequent bathing and frequent shaving away of the hair on a part of head were common practice. The latter practice was related to a medical belief. (5) Co-sleeping arrangements were made so that the youngest child slept with its mother in the same mattress, and the second youngest child normally with its father. (6) Physicians and medicines were rather easily available to them and were their first resort. In additon, they also depended on folk medicine and on magical rites. (7) Milestones of motor development were not different from those of the present day, but in some children, they were retarded due to serious illness and to thick clothes during winter time. (8) Children, especially boys, enjoyed various kinds of play activities in association with competent adults and with peers. (9) Sociocommunicative development was one of their main concerns. Adults were keenly interested in emergence of smiling, vocalization, and speech. (10) They interpreted children's imitation as expression of sociability. Adults were also interested in children's cognitive development as revealed by the questions children asked. (11) Boys began to learn reading of Chinese classics and writing around the age of six or seven. Education for girls was much less emphasized; they began to learn later and in less formal way than boys. (12) Curiosity about sex was not prohibited and was expressed freely by children under the age of seven. (13) One of the most important aspects of child treatment was development of self. Adults often used a behavior control strategy appealing to children's sense of self, and children developed consciouness of their outward appearence and personal characteristics. (14) The main part of children's social network consisted of their

family members, relatives, neighbors, and peers. (15) Various aspects of changing sibling relations within a family were described, including siblings' interests in a baby as well as negative effects caused by its advent, quarrels caused by growing competence of the youngest child, and the latter's dependence on older siblings. The emerging sense of self of the youngest child influenced its behavior directed towards siblings, which in turn influenced the sense of self and behavior of older siblings. (16) Beginning around the age of four, children's peer relations developed, and then they belonged to children's groups in the community. (17) With regard to behavior control strategies, adults tended to verbally appeal to children's self. Through a series of social interactions that were extended over a long period of time, adults' expectations were internalized by children, who later regulated themselves spontaneously. (18) Beginning at the age of six, girls came to gradually take responsibility for baby sitting and house chores.

Socio-cultural environments were analyzed in terms of six aspects: communication systems available to them; the influence of regulations by the Tokugawa shogunate and local feudal government on daily life; flexibility and lax discipline of the work place; social network systems within the community; mentality and attitudes toward children; and belief-value systems related to child development and child rearing.

Finally, general discussion was made on the following themes: the importance of daily social interactions as a basis for effective social support systems; substantial influences the youngest child exerted on patterns of social interactions within a family; and development of children's social participation and self regulation through interactions between the adults and the child.